
空へ present from satan

BOC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空へ present from satan

【NZコード】

NZ9587F

【作者名】

BOOC

【あらすじ】

8歳の誕生日。僕は信じられないプレゼントを贈られた。贈り主は、悪魔。普通の生活を送っていた一人の少年の運命が、異界の使者達によって狂い始める。その背景には遙か昔の悲劇があつた：

プロローグ

僕の身体に異変が起こったのは、ちょうど八歳の誕生日を迎えた日だった。

僕は兄弟の長男で、とても可愛がられていた。僕の一つ下にアルフォンスという弟がいたけど、こいつは誰に似たのか、意地つ張りでわがままな性格で、僕とはあまり仲が良いとはいえない関係だった。

でも、父さんも母さんも僕とアルのことをとても愛していたし、僕らも、両親が大好きだった。とりあえずは、幸せな家庭を持つていたんだ。

僕の運命をまるごとひっくり返した、あの日が来るまでは……

誕生日の晩に、僕の八歳を祝う盛大な誕生パーティーが開かれ、たくさんの村人が家に集まつた。フィナーレに、母さんが作つた特大誕生日ケーキが運ばれ、ケーキにささつた八本の色鮮やかな蝋燭を吹き消すとき。部屋の灯りが消され、蝋燭の小さな炎の灯火だけになると、集まつた人々がハッピーバースデーの歌を楽しげに歌つた。皆笑顔で、天使でも見るようになんて僕を見ていた。歌が終わり、母さんが耳元で蝋燭を吹き消すように囁いた。そのときの、優しく温かい声も、ちらりと見た笑顔もとても幸せそうで、僕にもその幸福感が伝染してにんまりと笑つたことを覚えてる。あのアルでさえも、美味しそうなケーキを前にして上機嫌なのか、僕にこつそりと笑いかけてくれた。僕も気前よく笑顔を返す　　その瞬間だつた。僕の首筋から背中にかけて、心臓が止まるほど冷たいものが、さあつ通り過ぎていつたのだ。途端、その幸福感が揺らいで、少しづつ薄れていった。幸福感が完全に消えてしまわぬうちにと、慌てて空気を小さな肺一杯に吸い込んだ

まさにそのとき、事は起こつた。

八本の蝋燭の火が一斉に消え、部屋の中が真っ暗になる。声を上

げる暇さえなかつた。

僕はまだ、息を吹きかけていない。

何がなんだか分からなくなつたけど、蠅燭を消しやすいようにと僕を抱き上げていた母さんの腕が小刻みに震え、指先に僅かな力を加えたのが分かつた。

その場にいた全員が僕に注目していたから、僕が息を吹いていないことはすぐ解つたはずだ。それにその日は、風が強く冷えるので、家中の窓は全て閉まつていた。

部屋の中は、しん、と静まり返つた。

この村には、ある伝説があつた。

今から、一〇〇年ほど前のことだ。村に一人の男がやつてきた。長旅でよほど疲れていたのか、村の門をくぐると男はその場で倒れ、気を失つてしまつた。

男は幸運にも、人情深い村長の家へ運ばれ、村の者が順番に訪れ、手厚く男を看病した。それがよかつたのか、男の容態は日に日に良くなつていつた。ある日、ある若い娘が男の看病に行つたとき、一目見た瞬間二人は恋に落ちた。短い交際の後、やがて二人は結婚し子供も生まれ、幸せな日々が続いた。

しかし、男は、ある重大な秘密を持つていた。それは、秘密とともに、当時とても重い罪だつた。男は、この世で最も邪悪な魔力を操る、魔術師だつたのだ。そのころ魔術師は、人間の恥だと罵られ、たくさんの人々から批判されていた。その時代、魔女狩りこそやつ

ていなかつたが、それと似たような魔術師の処刑は、頻繁に行われていたのだ。男はそのことを、愛する妻にも、親切にしてくれた村人たちにも黙つていた。言つてしまえば、この幸せな日々は永遠に戻つてこないことを、知つていたから。

ところがその村で、感染病がはやりはじめ、村民は予防接種を義務づけられた。当然男も予防接種に行つたが、そのとき、男のたくましい腕に、魔術師になると付けられる焼印があるのが見つかってしまったのだ。それを見た医師はすぐに王宮に連絡を取つた。家族とは、強制的に隔離されてしまった。

魔術師だと判明すると、男はすぐさま死刑になつた。その場で魔法を使い、逃げることも出来たが自分にこれまでよくしてくれた人々を傷つけることを、どうしても男の良心は許さなかつた。宣告をされたとき、男は己の力を振りしぼつて百年に一人、その国に生まれつき魔術の能力を持つた子供が生まれるよう呪いの予言をしたのだ。

「その子がちょうど八歳の誕生日を迎えるとき、ろうそくの火は消え、家族の絆は永遠に断ち切られるであろう。それはその子に悪魔が降臨した合図・・・呪われた魔術操る子供が、生まれるであろう。そして、いずれこの世を支配し、滅ぼす存在となる！」

男は死に際にそう叫んだ。

その言葉は、人々を恐怖で震え上がらせた。この時代、魔術師の魔力がこめられた予言ほど、怖いものは無かつたのだ。魔術師の予言が外れたことなど、過去ももちろん現在も、一度も無いのだから。

それは、今までずっと仲良く暮らしていた妻子に、魔術師とわかつただけで見捨てられた深い深い悲しみと、どうして魔術師だけがこの世界に受け入れてもらえないのかという悔しさや怒りが入り混じつた、強力な呪いだった。

そして今、この村に呪いの子が生まれた。

この僕が

「う、うわああ・・・・・呪いの子だあ！」

誰かが叫ぶと、皆悲鳴を上げたりわめき散らしたり大騒ぎだ。喚きながら慌てて扉のほうに行き、人の波に押されて吹き飛んだ人もいる。とにかく皆、恐怖と怒りに肩を震わせながら外へ、あるいは宮殿に電報を出すためになだれ込むようにして家から出て行つた。

あつという間に、ノードリー家は家族しかいなくなつた。といっても母のクラリスはパニック状態、父のフレッドもポカーンとして状況がのみ込めていないうだし、弟のアルは軽蔑しきつた目を兄に向け、口を半開きにして啞然としている。

「うそ！ これは夢よ！ うちの子が魔術師だなんて・・・・！」
クラリスがヒステリックな声を上げる。今にも泣き出しそうな顔だ。
「・・・・ そうだ・・・・ 魔術師なら、何処かに焼印があるはず・・・・」
アデル、こっちへ来なさい！」

ルはただ呆然として、されるがままになつていた。

自分が魔術師なんて信じられないはずなのに、不思議なことに、自分はそれをすんなり受け止めている。その受け入れている自分に驚いて、口もきけずに佇んでいた。

「…やめなきゃ…」

クラリスの悲鳴がすぐ近くで聞こえた。どうやら、アデルの左肩に焼印を見つけたらしい。アデルは自然と、惹き付けられるようにして、その邪悪な印に魅入った。

十字架のよだな形のマークに、蛇に似た醜い怪物が撒きついており、周りにはアデルには理解できない文字が五つ、描かれていた。その毒々しい、真っ黒な焼印は、幼い子供の小さな腕には、とても不釣合いで痛々しく、思わず目を背けてしまいそうなほど恐ろしかった。

「ああアデル。あなたって、本当に可哀想な子だわ。ねえあなた！この子、王宮に連れて行かれて、し・し・死刑にされたしまつ・し・死刑じゃなくても、この国から追放されるわ。・・・・・こんなに幼い子なのに・・・まだ、八歳になつたばかりよ？それも、ほんの数時間前は・・・七歳だわ」

クラリスはすでに泣き始めていて、死刑といつ言葉に身体を震わせた。フレッドは、まだショックから立ち直れないらしく、何の反応も示さない。それどころか、アデルのほうに顔を向けることさえしなかつた。クラリスは、まだ手の付けられていない、特大の誕生日ケーキの乗つたテーブルに力なく寄りかかり、アデルの焼印を見てまた目に涙をためた。アデルはそんな両親の様子を見て、自分がとんでもない犯罪を犯した犯人になつた気分になり、今この場から母の痛々しい視線から、消えてなくなりたいと思つた。

それなのに、アデルの身体は、ピクリとも動かない。ただひたすら、心に突き刺さるような母親の哀れむ視線に、耐えるしかなかつた。

ノードリー家は、クラリスのすすり泣く小さな声と、それぞれの息遣いしか聞こえなくなつた。

その沈黙を突き破るように、アルが今まで閉じていた重い口を開けた。

「いいじやん。母さんも父さんも・・・・なんでそんなに哀しい顔をしてるの？ 兄ちゃんなんか、村から追い出せばいい。僕、呪いの子が兄ちゃんなんて、嫌だよ！」

クラリスは、驚きのあまりしばらく口がきけず、まじまじとアルを見つめた。少しして口が利けるほど立ち直ると、アルを今まで見たことのないほど厳しい目で睨み、幾分声のトーンを落として言った。怒りを抑えていよいよ、かすれ声だ。

「なんてことを・・・・・言つんです・・・・アルテミス」

相當怒つていいのか、アルの本名を口にした。

「いくら呪いの子であつても、アデルは、正真正銘、あなたの兄ですよ。今すぐ、謝りなさい」

「嫌だね！ 兄ちゃんを早く追い出してよ！」

クラリスの目が大きく見開かれ、顔がアデルの焼印を見たときよりも蒼白になる。クラリスはしばらく怒りを必死に抑えるように、口を真一文字に結び、ひたすら息子を睨んだ。

「 アルテミス・ノードリー。今すぐ、謝りなさい」

ゆっくりと言葉を選び、繰り返す。

「 嫌だつたら！ ・・・・なんで母さんは兄ちゃんを庇うの？ 犯された魔術師だよ！？」

クラリスの顔が突然歪み、目から涙が次々と溢れ出した。アルが、たじろぐ。

「 け 犯れたなんて・・・・そんな酷いこと、二度と口にしないで！」

涙声で、クラリスが振り絞るように懇願する。アルはクラリスの態度に呆気に取られ、ただ困惑したようにおもむりと部屋と部屋の間に目を泳がせた。

フレッドは、今頃になつてやつと状況が飲みこめてきたらしく、黙つたまま床に座り込んでしまったクラリスの手を引いて立たせ、椅子に座らせた。それから、クラリスの小刻みに震える肩を優しく気遣うように撫で、アルを怒りをこめた視線で睨むように一瞥して、それからアデルへ顔を向けた。しかしアデルは、父親の顔をまともに見れなかつた。

その瞳にどんな感情があるのか、知つてしまつのが、怖い。そう思つてゐる自分がいた。

もし、いつもの温かい、包み込んでくれるような瞳じやなかつたら、哀れみや励ましの感情以外のものがその目にあつたとき、それを見てしまうのが、泣きたくなるほど、怖かつた。

だからさつきと同じ方向を、その青い目になにも映さないままぼんやりと見つめ、何んでいた。

死にたいと、思つていた。呪いの子なんかになつてしまふんなら、生まれてこなければ良かつた。泣きたいのに、涙は出てこなかつた

し、叫び声を上げて喚きちらしたかったのに、喉がカラカラで声も出ない、身体も思うように動かない。

だからそのとき、勢いよく扉が開いて村の男たちが入ってきても、何かを叫んでアデルを縄でしばりあげていても抵抗しなかった。

最後に見たのは、父さんの怒り狂った顔と母さんの泣き顔。

そして、見つめられるとぞくりとして、冷や汗が出るほど、きつく冷たい、灰色の氷の瞳。

「・・・・・デル・・・・・」

「アデル・・・・・・・」

アデルはこの低い、よく響く声で気がつき、さっと顔を上げた。自分が、高い脚の椅子に座っていることが解った。声の主の顔は、アデルの三十センチほど上で、アデルを見下ろしている。

男は、一度もアデルからを視線を外さず、真正面から、ひたとアデルを見据えていた。アデルは、その威厳ある翡翠のような瞳を見つめ返しながら、いつの間にか、きつく身体に食い込んでいた縄が取れていたことに気づいた。

「あ・・・・あの・・・・おじさん、誰ですか？」

思つたことが、素直に口から次いでた。本当に、この翡翠のような切れ長の瞳も、低く印象に残る声も、何もかも見覚えがない。

「こりつ！ この御方におじさんとは何だ！ 『汚れし者』め！」

突然真横から声がして、アデルはびくりと身を震わせ、横に何人の立派な赤い服を着た男が勢ぞろいしているのに気がついた。アデルはそれが、よく物語に登場する、お城を守る衛兵だとすぐに解つた。ということは、此処はお城なのか？ この国にあるお城といえ

ば、あそこしか　！

・・・・・まさか。

アデルは不吉な事実を無理矢理頭の隅に追いやった。ただでさえ混乱しているのに、混乱の種をわざわざ一つ、増やしたくない。

それより、衛兵の一人が言つた、『汚れし者』の意味がよく解らない。

アデルは口を半開きにして、田の前の衛兵をじっと見た。その様子に腹が立つたのか、さつきの男とは違う者がアデルに掴みかかるうとする。

途端、翡翠の田の男が素早く反応した。厳しい目でひと睨みし、首を横に振つて衛兵を制した。衛兵はそれを見て少し驚いたようだが、更に険しくなる男の田にたじろぎ、素直にアデルから離れると、男に向き直り、詫びるよう恭しく頭を下げた。そして素早く頭をあげ、さつき居た場所に戻り、気をつけの姿勢をとつた。そのまま、ピクリとも動かない。

少しほほとしたアデルは、男に感謝の気持ちも含めてちらりと田配せし、それからゆっくりと部屋の中をみまわしてみた。

部屋はとても広く、天井には大きなシャンデリアが幾つも輝いている。床は、淡く光りを放つ程に磨き上げられた、真っ白な大理石で出来ている。そのど真ん中に、青い絨毯が真っ直ぐに伸びていた。アデルはその行く先を田でゆっくりと追い、視線を上に上げた。低めの段差が、三つほどある上に、真っ青な装飾物たちに彩られた金縁の王座がひとつしっかりと重く構えていた。

アデルはどきりとして、悪い予感を追い払うように王座から慌てて田をそらした。

真っ赤に染め上げられた壁には幾つもの　恐らく王族の者だろう。今より一つ古い肖像画の男に見覚えがある。アデルのいる村に訪問したことがあるのだ　肖像画が掲げられている。その中で特に清新しく、生き生きとした筆使いで描かれた、素晴らしい絵に視線が止まる。田の前の男と比べてみると、どうやらその肖像画のモ

「アデルはこの男らしい。」

途端にアデルの頭のなかは真っ白になつた。アデルは、さつきの自分の予感が見事に的中したことを確信したのだ。目の前の男の頭には、金色に輝く王冠が乗っていた。

アデルはその王冠を目にし、ここで初めて驚きを感じ、目を見開いた。

「僕の目の前にいるのは、この国の王だ！」

「今宵、悪魔からの邪惡な贈り物を手にし、伝説の子 イースタービレッジ、ノードリー 家長男」

「アデル・ノードリー」

アデルが部屋を一通り見渡すのを待つてから、国王は改まって、アデルの名を繰り返す。

「は、はい・・・・・」

アデルはぴつと背筋を伸ばしていった。国王はにっこりと品のいい微笑みを浮かべ、アデルと国王以外の者を全て部屋の外へ出させた。アデルは不安そうな顔をして衛兵達がぞろぞろと部屋の外へ出て行くを見送った。大人がわざわざ人払いをして話をするのは、大抵良い話ではないのだ。

「さて、あまり時間がないのでな 唐突だが早速、本題に入ろう」
アデルは黙つて、国王が続けるのを待つた。

「本当だつたら、お前は死刑になるはずだが」

アデルはそれを聞いて、首筋に悪寒が走つた。ゴクリと、唾を飲み下す。

「まあそう硬くなるな 大丈夫。お前は死刑にはならぬ。お前はまだ、幼すぎるのだ。そこで私は考えた。アデル、お前が八年後十六歳になつたとき・・・」

そのとき国王はアデルの不思議そうな顔に気がつき、困つたような笑顔をちらりと見せて説明をした。

「ああ、その・・・ 魔法界・・・・・（国王はこの魔法界の言葉をいうとき、こんな汚らわしい言葉言いたくないとでも言うよ

うに、顔をしかめてみせた）といふところでは真に非常識ながら十七歳が成人らしくて 書物を読んだんだ その頃にはもう殆どの魔法も使えなくてはならないようなのだ。だからその・・・・準備もかねて、とても大切な・・・・・強大な力をもつ、あるモノをお前に探してきて欲しい」

国王はここで言葉を切つて、アデルの澄んだ青い瞳を真っ直ぐに見つめた。アデルは戸惑いをこめて国王の翡翠のような瞳を見つめ返した。が、なぜか国王の目を見た瞬間、わけが分からなかつたことが無理矢理にも受け止められているような気がした。

「その探し物はお前の力を借りないと手に入れられない、特別なものなのだ」

国王は茶目っ気たっぷりにアデルに笑いかけると、小指を差し出した。今度はアデルにもその意味がすぐにわかつた。誓いの儀式だ。

アデルはおずおずと自分が細い小指を差し出し、国王の指に近づけた。国王はアデルの指と自分の指をしつかり絡めると、終始、微笑を浮かべながらゆっくりと言つた。

「私、トゥーマリア王国現国王アーノルド・ヴィリアンは、この呪われた少年が十四歳の誕生日を迎えるまで、この国にとどまり普通の暮らしを送ることを認め、生活を保護することを誓います」

アデルは、呪われた少年、という節に少し戸惑つたが、大きく息を吸い込むと国王を見上げた。

「お前の番だよ」

国王は促した。アデルは乾いた唇をなめると咳払いをした。

「私、トゥーマリア王国イースタンビレッジ、ノードリー家長男アデルは、十四歳の誕生日を迎えるその日まで、国王に変わらぬ忠誠と国民の義務を果たすことを、そして呪われた子として十六歳になつたら國を出て国王のお役に立つことを、誓います」

アデルは大きくうなづくと、絡めていた指をそつと離した。

「さあ、もうお行きアデル。お父さんとお母さんのもとに帰るんだ」

国王が甘く、やさしく、囁く。

アデルは詰めていた息を吐き出すと、国王に向かって深々とお辞儀をした。

父さんと母さんの元に帰れる！それだけでアデルの胸はいっぱいです、そのとき国王が浮かべたずる賢そうな微笑と、僅かにめくれあがつたマントから覗く足に、自分と同じ、魔術師の焼印があるので、気づきはしなかった。

帰りは立派な馬車で衛兵が送ってくれることになった。アデルは馬車が揺れるたびに、お尻を硬い座席にぶつけて何度も顔をしかめた。しかし隣に座っている、体格がよく、田つきの悪い衛兵に文句を言つほどいの勇気はなかつた。しばらく馬車に揺られていると、ふと衛兵が話しかけた。

「お前は運がいいな。今の国王のときに魔術師になつてアデルはむつとして小さな声で言い返した。

「別になりたくて魔術師になんか、なつたんじやありません」

「あまあ、そう怒るなよ。そりやわかつてゐぜ。おれだつて、魔術師なんかになるのは「めんた。ただ、現国王は歴代の国王の中でも一番寛大で心優しいお方だと隣国にも噂されるほどだ。あと一足早かつたら今頃お前さんのその首は、胴からとっくに離れちまつてるだろうよ」

アデルはまた首筋がぞくりと冷たくなり冷や汗が出た。何か言い返したかつたが、今声を出したら震えていて、衛兵に弱虫だと思われてしまつるので、しかめつ面をして黙つていた。

「それより、・・・なあお前、国王陛下から何を探しに行くのかきいたか？」

今度の衛兵の声は真剣だった。

アデルはつとした。

「聞いてません。母さんたちに会えるって、そばかり考えてたから・・・あの、あなたは聞いたんですか？」

衛兵は微かに眉をしかめてから小さな声で答えた。

「・・・・・いや。聞いてない」

衛兵はそれ以上話しかけてはこなかつた。

あまりずっと馬車がつかないので、アデルはうとうとし始めた。

国王のところへ行くときにはこんなに長くからなかつたのに・・・

アデルはあまり働かない頭でやつとこれだけ思つた。

家に着いたころには、もうアデルはぐっすり眠つていた。
気がついたのは、畠田の畠。奥の部屋で、クラリスとフレッドが
何か言い合つてゐるようだ。

アデルはゆっくりと起き上がつた。ここがリビングのソファだと、
少ししてから気づいた。クラリスが気を遣つて、すぐに寝かせてく
れたのだろう。ゆっくりと立ち上がりてみて、危うく床に頭を打ち
付けそうになつた。世界がぐるりとまわる。一瞬だが、激しい吐き
気がこみ上げた。アデルは何とかソファにしがみ付き、再び立ち上
がると、おぼつかない足取りでクラリスのもとへ歩き出した。

アデルが近づくと、クラリスが何か叫んで、アデルを抱きしめた。
フレッドはアデルを見て、ほつとしたように小さく笑いかけてくれ
た、その笑顔には、父親の、子供が無事なことを心から喜ぶ純粹な
気持ちしかなかつた。アデルは心底ほつとして、また倒れそうにな
つた。クラリスが支えてくれなかつたら、床に頭を強打して、死ん
でいたかもしれない。

「アデル、大丈夫？ 気分が悪いの？ 元氣がないようね・・・
まあ、それもそうだけど」

「大丈夫だよ。・・・母さん、僕、十六歳になつたら、この国を
出て行かなきやならないんだって」

アデルを抱きしめるクラリスの腕に僅かに力がこもつた。

「・・・ええ、知つてゐる。昨日の夜教えてもらつたの。・・・

でもそれまではずつと家にいていいのよ

クラリスはアデルを離して、瞳を真っ直ぐ見つめた。

「お腹、すいたでしょう。ちょっと遅いけど、朝ご飯にしましょう」

クラリスは素早く台所の方へいった。そのとき、階段の上でアルがじっと見ていたのに気がついた。アルは兄が自分に気がついたとわかると、階段をだつと降りてきた。

「兄ちゃん、魔術見せてよ」

気持ち悪いくらいの、可愛い笑顔だ。アデルは思わず目を逸らした。「なんだよ、アル。お前昨日まで、僕のことすげく嫌つてたじゃないか」

アルは困ったように頭をかきながら、上目遣いに言った。

「ごめん。僕も昨日は兄ちゃんが魔術師だと知つて、興奮しちやつただけだよ、本当に。だからさ、早く魔術を見せてよ」

「…………そう言われたつて。僕まだ一度も魔術なんか使つたことないし…………。わかんない。…………わからないよ」

アルはそれでも食い下がる。

「まあ、いいからいいから。とりあえず何か浮かばしてみてよ。悪魔から力をもらつたときから、魔法が使えるんでしょ？…………僕聞いたんだ。友達のヴィルから。兄ちゃんも知つてるだろ？いいなあ。魔術師って、なんでも出来るんだよね？ 空を自由に飛べたりしてさ。ほんと、羨ましいや」

アデルはその言葉を聞いて、さつと血の気が引くのがわかつた。弟があまりにもむじこじことを、無邪気に、ただ純粹な好奇心で言つてきたことにも、腹が立つ。

羨ましいだつて？ 好きで魔術師になるわけがない

アデルは必死に自分のなかの凶暴な影をおさえ、出来るだけいつも調子で言つた。

「つ…………本当に、どうやるかわからないんだよ」「ふーん…………じゃあ、何か呪文を言ってみなよ。どうにかなるかもよ。…………ねえ」

「・・・・・ わかんない」

アルは少し考えてから疑わしそうに兄を見た。

「本当に？ 本当にどうやるかわかんないの？ 本当？」

アデルは大きくなづいた。

「本当に本当に？ ねえほんと？ ほんとはわかるんでしょ？」

あんまりアルが「本当に？」を連発するのでアデルはついに真っ赤になつて喚きだした。

「本当にわかんないって言つてるだろ？ 何回言つたら分かるんだこの・・・・石頭！」

途端にアルはびっくりしたように目を見開いて、回れ右をした。そしてまるで誰かに操られているように、すたすたと行進しながら階段を上つていった。

「え？」

今度はアデルがびっくりする番だつた。アルはいつもこんな素直じゃないはずだ。

今思えば、これが僕が一番最初に使つた、「魔法」だつた。

それからの八年は、とても短かった。いや、本当は長い年月がたつていたのだが、アデルにはとても短く感じられたのだ。それこそまるで、「魔法」のように。

アデルはアルに使った魔法以外、この八年間、魔術は一度も使ったことがない。しかもその魔法は自分では自覚のないものだつた。ただでさえ、アデルが近くに居ると皆逃げ回るのに、魔術なんか使つたら袋だときだ。十六歳になる前に、死んでしまう。

十六歳になつたアデルは、再びあの遠い王宮へ向かつたのだった。

「母さん、じゃあ行つてきます」

アデルは心なしか弱々しい声で言つと、母親の小さな身体を、ギュッと抱きしめた。それから戸口へ向かいもう一度振り返ると、クラリスは励ますように、優しく微笑みかけてくれた。アデルはそれでほんの少し元気を取り戻し、自分も微かに微笑むと、また不安に押しつぶされ、無様に母のもとへ戻ることになる前に急いで外へ出た。そして深く溜め息をついてから、陰鬱な表情のまま、重い足を前に進め始めた。

十六歳になつたといつても、アデルはそれほど変わらなかつた。身長も、百六十センチちょっとしかないし、体格もまだひょろりとしている。顔つきは、よく大人っぽくなつた言われるけれど、くりくりの大きな青い瞳や、肌が白いせいですぐに紅く染まる頬のおかげで、まだまだ子供っぽい。それに比べて、アルテミスはものすごく成長した。まだ十一歳なのに、兄よりも数センチほど背が高いし、声も早々と声変わりして、大人っぽくなつてきた。体格なんか、八年前、アデルが見たあの衛兵と互角なほどだ。しかし残念なことに、

アルのあの小生意氣で意地つ張りな性格は、まったく変わらなかつた。

アデルは重い足を引きずるようにして歩きながら、この八年間、考えに考え、それでもまだ答えの出せないあの“問題”的ことを思つた。

その“問題”とは、八年前、あの王宮で国王に言われた「探し物」のことだ。

国王のわざとらしいほどの茶目つ氣たつぶりな笑顔。八歳のころ、アルに魔術をせがまれたときの笑顔にそっくりだつた。何か怪しい・・・。アデルは最近から胸の奥で、もやもやと胸やけがする。これは、八年間の中でもあつた。この感じがすると、必ず近いうちに不運がやつてくるのだ。

アデルはぼんやりと物思いにふけりながら、「待ち合わせ場所」まで行つた。待ち合わせ場所は、このイースタンビレッジで一番大きく、村の中心にあるイースト広場だ。

アデルの住んでいるところは村外れで、静かなところだつた。イースト広場は村の中心部にあるので村外れから行くと、少なくとも三十分はかかる。しばらく待つと、道の奥のほうから、馬の軽快な足音が聞こえてきた。すぐに、立派な白い馬に引かれた、大きな馬車が見えてきた、なんとなく、懐かしい感じがする。

このときアデルは、いつも賑やかなはずのイースト広場が、なぜかガランとしていて人気がないことに、気づかなかつた。今思えば、最初にこのことに気づいておけばよかつたのだ。これがあの人人が仕掛けた、最初のトラップだつたのだから。

それからアデルは、まだ物思いにふけりながら上の空で馬車に乗り込んだ。考へが、不思議なほど頭のなかでグルグル回つていた。次々に新しい考へが浮かび、他の事に気をつける暇が全くない。

衛兵や御者の様子がおかしかつたことにも、アデルは気づかなかつた。衛兵はしつかりはしているが何かしょんぼりとしていて、馬車が揺れると、まるで人形のようにされるがままになつてゐるのだ。

御者も衛兵とまったく同じだった。ただ馬を操つていいだけで、一言もしゃべらない。しかも馬の足音さえしないのだ。白馬は空を走つているように、ぬれている地面に触れていない。アデルがこのことに気づいたのは、もう何時間もたつたあとだった。

はつとして顔を上げると、辺りはシーンとして、自分の呼吸の音しか聞こえない。アデルは一瞬、僕の耳はおかしくなったのかと思った。鳥が鳴く声もしない。王宮のある村プロテマは、国中の村の中で一番賑やかで、一番美しい村と評判なだけあってここにら辺にぐれば、思わず耳を塞ぐくらい騒がしいのに。アデルは急いで、馬車の外をみてみた。

誰も居ない。

道を歩く娘達の喋り声も、学校へ向かう子供達のはしゃぐ声も、家の前を簫で掃くリズムのいい音も、家にもぐりこんでいたねずみを追い払う、数人のおばさんが喚く声も、道端で、果物や布生地を売る威勢のいいおじさんの声もない。道の両側にたつ木々のざわめく優しい音も、小鳥が紡ぎだす、美しいメロディも――！

言葉通り、人っ子一人、いないのだ。静か過ぎる。アデルはブルッと身震いをした。

王宮はもう、目の前だった。

不意にアデルの頭のなかで、八年前の王宮での記憶が蘇った。国王の茶目つ氣たつぶりな笑顔、温かく大きな手。よく響く印象的な声に最後にちらつと見た少し意地悪そうな微笑まで。そして、アデルの頭の中で「気をつけろ・・・警告だ」の文字がガンガン響いた。アデルはこの文字の意味と記憶に蘇つたあの光景で、これも魔術師の能力なのか、直感的にわかつた。

僕がこれから行くところは、危険だ。

アデルは「ぐりと生睡を飲んだ。大きく、飲み込まれそうな王宮は容赦なく、じわじわとアデルに近づいてきた。

「カタン・・・」

静かに馬車が止まつた。衛兵は無表情のまま扉を開け、恭しくお

辞儀をした。アデルは用心しながら馬車を降り、無表情の衛兵たちの案内に従つた。

八年前来たときは、まだいろいろな表情をしていて、いろいろな動きをしていたが、今は無表情。腕だけを動かし、道を示している。

何時間も経つたように思える。同じ所をグルグル通つた気がする。そろそろ、気が変になつてしまつんじやないか？ アデルの目が回つてくるころになつて、やつと国王の部屋の前についた。そこで衛兵はお辞儀をして、さつさと去つていった。アデルはしばらく呆気に取られて去つていく衛兵の背中を見ていたが、ゆっくりと扉のほうに田を開けた。

なるほどね。一番嫌な仕事は、僕に任せることだ。
この扉を開けるのがどれほど大きな仕事か、あの衛兵は知つてか知らずか、アデル一人を残して去つていった。今、押しつぶされそうな程大きな不安を胸に秘めたアデルが、不安の種である張本人のいる扉を、威勢よく開け放し、入つていけるだろうか？

アデルは深く溜め息をついて、案内をした衛兵を小さく恨みながら、扉の取つてを掴んだ。ありつたけの勇気を出して、勢いよく捻る

八年前の部屋と、少し変わっていた。大きなシャンデリアは見覚えがあつたし、国王自身もそれほど変わつたところはない。しかし、大きく変わつたところが、所々見受けられた。まず、壁紙の色が、真つ赤ではなく濃い灰色になつていた。趣味が変わつたんだろうか？それに、たくさん掛かっていた歴代国王の肖像画も今は姿を消し、代わりに趣味の悪い、白黒の薄汚い絵が、散り散りに掛けてあつた。そして、一番大きく変わつたところは、肘掛けのついた椅子に深々と腰掛けた、国王の右隣に立つ、美しい女性だった。

女性の、長く美しい、艶やかな金髪の上には、銀色に光るティアラが乗り、肌は驚くほど白い。あまりに白すぎて、灰色の部屋の中

でやけに輪郭がはつきりと見える。ほつそりとした首もとには、銀色に輝く宝石がはめ込まれた、ゴージャスなネックレスをしていた。ドレスはすべて真っ白。シンプルだが、よく見ると高級そうで、胸のところには大きな銀色のリボンがついていた。そして、形の良い顔の、その大きな緑色の瞳は、アデルを真っ直ぐと、冷ややかに見つめている。

「やあ、久しぶりだ。さすが、成長したな。アデル・ノードリー」
国王の、今も変わらない、あの印象的な響く声で、女性に見惚れていたアデルは、ハッと我に返った。

「約束の時期が来た。　よく来たな、まあ座りたまえ。よく話合おう」

国王は目の前の椅子を指した。アデルが動くと、女性の目もそれを追つて一緒に動く。

アデルはその視線を気にしてちらちらと女性のほうを盗み見た。
国王はそれに気づくと女性のほうを向いていった。

「やめなさいティーナ。アデルが気にしているだろ？」

ティーナと呼ばれた女性は、ちらりと国王を見て、それからアデルに無理矢理ぎこちない微笑を送ると、もう一度国王を見て今度は愛想よく微笑みながら謝った。

「「めんなさい、お父様」

とても静かで、鈴でもなるような美しい声だったが、すこしきつい感じもあった。アデルはそのとき、ティーナと呼ばれた女性の目の色が、国王と瓜二つのに気づいた。国王は軽くうなずくと、女性のほうを指してアデルに視線を向けた。

「紹介しておこう。こちら私の娘、ティーナ・エリン・ヴィリアンだ。妹もいるのだが、奥の部屋にこもっていてな……。次の世代の女王だ」

ティーナはアデルに向かつて形だけのお辞儀をして、顔をあげるとまたアデルのことじろじろと眺め始めた。アデルはまさか、王族にお辞儀をされるとは思わなかつたので、戸惑いながらもお辞儀を

返した。

国王は次にアデルの方を指してティーナ王女に言った。

「そしてこちらが、呪われし子ども、アデル・ノードリーだ。約束のときまで、イースタンビレッジに住んでいた」

アデルはぎこちなくお辞儀をしながら、そのとき、国王がちらりとティーナ王女の方を見て意味ありげな視線を向けているのを、見逃しあしなかった。

アデルの不安な気持ちは限界を超えて、自分でも思いもよらないことに、ずっと心にしまっていたことを、叫ぶように訴えかけていた。
「あ、あの・・・・・国王陛下、僕はこれからいつたい何処へ・・・・・何処へ何を探しに行かなければならんでしょうか。僕を生かしてまで手に入れたかつた物とは、一体なんなのでしょうか　ずつそれが気がかりで・・・・・教えてください！」

一人は驚いて呆気にとられ、しばらく顔を見合させて沈黙していた。氣まずい沈黙のあと、ティーナが怒りでギラギラと目を光らせながらズんずんと前に出てきた。アデルはそれを見て、しまったと思つたが、もう遅い。ティーナは、国王が止めに入る隙もなく真っ白い顔を真っ赤に染め、早口で喚き散らしはじめていた。

「アデル・ノードリー！　あなた、今誰と話していると思つてるの？　目の前のお方はトゥーマリア国王と、その娘ティーナよ。なんて口の聞き方なの・・・・・！　自分がどんな物言いをしてるか、解つて口を開いてるのかしら。いつたいどんな暮らしをしてきたの？　きっと礼儀というものを両親から教えてもらつてないんでしょね。・・・・・まあそれもそうだわ、イースタンビレッジですつて？　この国で一番薄汚い所じゃない！　・・・・それにして失礼な言い方だわ。あなた、自分がどんな身分かもわかつてないのね。私たちと同じ部族だって聞いたから少しばかれてるのね。私けど・・・・・ちつとも礼儀がなつていらないじゃない！　こんな人になんな大事なものを　」

「ティーナ！　言ひすぎだぞ！」

アデルはびくりと身を震わし、反射的に国王の方を見た。国王はものすごい剣幕でティーナを睨みつけている。ティーナはハッと口を押さえ、いまだアデルを睨みつけながら静かに言った。

「「」・・・「」めんなさい。言い過ぎましたわ。　お父様、私部屋に戻ります」

ティーナは国王の返事も待たずにカツカツと靴音をたてながら急いで部屋を出て行つた。アデルはなんだかほつとしたような、悪いことをして氣まずいようなおかしな気分になつた。ティーナがいると、周りの空気が張り詰められているような感じがするので、居心地が悪かつたのだ。それにもかかわらず、さつきの国王の剣幕には驚いた。優しい印象のあつた国王があんな大声を出すなんて・・・。アデルは改めて国王を見た。

国王はやれやれと首を振ると以前見たことのある、あの茶目っ気たっぷりな笑顔をアデルにぱいぱい見せてから、口を開いた。

「ティーナのことは気にしなくていいぞ。いつもカリカリしていてな。すぐに忘れてくれ。ところでお前がさつき言つた探し物ことだが・・・これは非常に危険なことなんだ。並の人間じゃあ、出来ない。だから、お前が大きくなるまで待つた」

アデルは国王の顔を見つめながら、やっぱりだと思った。

「お前はまだ小さかったから、わからないだろうが、この国の大好きな五つの村　お前が住んでいるイースタンビレッジも入る。ノーザンビレッジ、サザンビレッジ、ウェスタンビレッジ、そしてこの王宮がある一番大きな村、プロテマビレッジ。この五つの村には一つずつ宝石がある。いずれもこの国の宝だ。ところが何百年か前に、その宝石を悪の鳥　巨大なカラスのような怪物が飛んできて、その宝石をどこか遠いところへ投げ捨ててしまった。別々のところへな。巨大な鳥がなぜこの地に来たのか、どうして宝石を盗んだのか、理由は解らないが、その伝説が描かれた古い書物には、とても興味深いものが描かれていた。　地図だ。宝石の捨てられた位置を推測して作られた　。あくまで推測だが、そこにある可能性が高い

ことが最近になつて明らかになつた。その五つの宝石のうち少なくとも、三つの居場所はこの地図でわかる。が、いずれもとてもなく危険な場所だ。しかも後の二つはまだ行方がわからんときている。そこで、魔術師のお前が、死刑のかわりに行くことになる。伝説によると、その五つの宝石がすべてそろつと、強大な力を發揮するといわれているのだ。 いずれにせよ国の宝だ。一刻も早く見つけ出し、元の場所に戻さなければ

「

国王はここで言葉を切り、呆然としているアデルにあの笑顔を向けた。

「驚くのも解るが……大丈夫、お前は悪魔から力を得ていて。その力があれば、宝石は取り戻すことができるだろう。並の人間なら、できない事だってできる。魔法の使い方は、道中で嫌でも自然と覚えられるだろう。魔力が無くては通れない道が、幾つもあるからな。しかし、これは本当に危険な旅になるはずだ」

国王は、感情の読めない翡翠の瞳で、アデルをひたと見据えた。アデルの瞳が、その視線を受け止めるのを見て、ゆっくりと続ける。

「死を……死を……覚悟でなければできない。 良いな？」

アデルは黙つて国王の話を聞いていたが、次第に身体がぶるぶると震えだし、止まらなくなつてしまつた。

こんな旅、無理だ。いくら僕が魔術師だつて、魔法なんか一度もやつたことがないのに……。国の宝だなんてそんな大変なもの、探し当てることなんてできない。ましてや死を覚悟の上なんて……こんな急に言われたつて。

アデルは必死で震えを抑えながら国王を真つ直ぐに見つめ、声を絞り出すようにしてやつとの思いで口を開いた。

「国王陛下。大変失礼ですが、その旅は到底僕の手には負えません。まだ一度も魔法を使つたことがないのです……それに……」

「ほう、ではお前は死刑で良いのだな？ この旅に行かないとすると、お前を生かしてはおけん。国の恥だ。……私は約束を守つた。お前が十六歳になるまでこの国にとどまらせ、普通の生活を

保障した。そうだろう、違うか？ 今度はお前が、約束を果たすと
きだ。それにお前がこの旅を拒絶するなら 当然家族もお前と同
罪とみなし、死刑を執行することになる

国王はアデルの言葉を遮って、今まで一度もアデルに見せなかつ
た、氷のように冷たい目を向けながら吐き捨てるように言い放つた。
アデルは少しの間、国王の言った意味が理解できなかつた。

そして、次第に身体の奥底から湧き出る怒りに肩を震わせ、国王を
睨むように見つめた。憤慨で頭がおかしくなつてしまいそうだ。國
王は、依然冷淡な顔つきのまま、アデルの返答を待つてゐる。その
表情には、アデルの反応を楽しむかのような余裕が漲つてゐる。ア
デルはそれにも腹が立ち、もう少しで国王に飛び掛りそうになつた。
酷い 結局は、無理矢理でも僕を旅に行かせるつもりだつた
んだ。今までの態度は、僕を騙すため？あの優しい笑顔も温かい
手も全てまがい物だつたのか？ それに僕が行かなかつたら、
母さんや父さん・・・アルが

アデルは顔を上げ、真正面から睨むように国王を見た。国王はう
ろたえる様子も見せず、感情の無い冷たい陰が覆うその視線をアデ
ルに注いだ。その視線からは、何の思いも読み取れない。表情も青
白く、なんの感情も表さなかつた。

少年は、覚悟を決めた。

「・・・分かりました。行きましょう、宝探しの旅へ」

王宮から帰るときも、いつもの賑やかさはなく、まったく人気がなかつた。アデルは少し気にしてるもの、これから行く危険な宝探しのこととで頭がいっぱいですぐに気にしなくなつた。それに、行くときよりもあまり時間はかからなかつたように思える。

五つの宝石の地図は、国王から直々に手渡せられた。最初に行く場所はなんと「怪物の洞窟」だつた。アデルは最初にこの文字が目に入ると、驚愕で地図を落としそうになつた。

「怪物の洞窟」とは、イースタンビレッジに隣接するノーザンビレッジとの境にある、怪物の存在がほぼ間違いなく確認されたと村人から恐れられているところだ。

昔、ノーザンビレッジに住む血の多い男たちが、あんまり村人が怪物、怪物と騒ぐので、本当に怪物がいるのかと調査をしに洞窟へ行つてみた。しかし、いくらたつても帰つてこないので、村人たちが搜索隊を出すと、その洞窟の前で男たち全員の遺体が発見された。巨大な爪のような、鋭い刃物でズタズタにされた無残な姿で。また、本当に怪物を目撃したという者も数人現れ、怪物は実在するものだと分かつた。それからは村人たちは、その洞窟を「怪物の洞窟」と呼ぶようになり、誰も近づかなくなつた。

そこに在るとされている宝石は「ルビー」

アデルは生まれてこの方、「ルビー」なんて高価な宝石、みたこともなかつた。アデルはこの地図と説明を読むと、改めて自分がとても恐ろしく、危険な旅へ行くことを実感した。それにこれは、アデルの家族と王族だけが知っている、極秘の旅なので自分が魔術師のアデル・ノードリーだということ、旅の目的を国民に絶対に洩らしてはならないと、忠告された。

アデルは家に帰り、準備ができ次第旅立つことを両親に伝えると、荷物をまとめに部屋にこもつた。しかし 正直言つて、アデルは荷物といつても、何を持って行けばいいのかさっぱり分からなかつた。旅行でさえともに行つたことが無い。とりあえず、地図と、寝袋、水、毛布・・・・・

下の階では、クラリスが泣きじやくつて、フレッドがそれを必死で慰めている。クラリスのキンキン声が、響いてきた。

「酷い！ こんなのが・・・あんまりじやない！ 帰つてきてすぐに出るなんて。ましてやそこが怪物の洞窟なんて。酷すぎる！ 私、国王に文句を言つてくるわ！ うちのアデルがあんな危険なところへ行くなんて許せない！」

クラリスがドスドスと玄関の方へ行く音がした。フレッドが慌ててクラリスを落ち着かせようとめちゃくちゃなことを言い始める。

「お 落ち着けクラリス。大丈夫だ。アデルはもう大きくなつた。前みたいな、幼い子供じやない。・・・陛下にだつて、何か・・・お考えがあるのかもしないし。それに文句を言つたつて、聞いてくれるはずないじやないか。相手はこの国の王だ。僕らが太刀打ちできる相手じやないんだ。・・・解つてくれ、クラリス」

「じゃああなたは、アデルがあんな恐ろしいところへ行つて無事に帰つてくるのを、指をくわえて此処で待つっていうの？ とてもじゃないけど、私には無理よ！ わが子がいつ怪物にやられて死んでしまうのか解らないのに・・・・・信じられないわ・・・・あの子、魔法なんか一度だつて使つてないのよ？ 本当に魔術師なのが、疑うのが普通よ・・・・」

クラリスは力が抜けたように床にへたり込んだようだ。もう暴れる音はしてこない。フレッドが安堵の溜め息を吐いて、アルを呼んだ。その顔が、悔しそうに歪んでいるのを、なんとなく想像できた。

突然のお呼びで、隣の部屋からドタドタと不器用に部屋を出るアルの足音がする。フレッドは、アルの信じられないくらいの馬鹿力を借りて、母さんを抱き上げ、ベットに運び込むのを手伝わせるみたいだ。

アデルはそのやり取りを、おかしな気分でぼんやりと聞いていた。自分がクラリスやフレッドの態度を、嬉しく思つべきか重荷に思つべきか、解らない。

アルはというと、八年前、アデルが魔術を使うのを断つて以来、更にアデルに嫌悪を抱くようになり、口クに口も聞かなかつた。最初こそ寂しく思ったものの、もともとアデルもアルに好意を持つていたわけでもなく、あまり気にしなくなつた。

しばらくしてから、アデルはこれでいいのかと、自分の荷物に不安を覚えながらも仕度を済ませた。その後、フレッド達が二階へ行つてゐる隙に、こゝそりと台所にいき、食糧を調達した。ここに残る家族のことも考え、あまり多くは持つていけなかつたが、足りなくなつたら近くの村で調達すればいいと思つた。旅に必要な費用は、国から余るほどもらつてゐる。

全ての仕度を終わらせて、部屋に戻ると、なにもすることがなくなつてしまつた。時計をみると、まだ寝る時間にしては早い。太陽も、沈みきつてしまつて惜しむかのように、西の低い空にぼんやりと浮かんでいた。アデルはしばらく部屋の中を当てもなく歩き回つた。

そして、ある決心をすると、引き出しから細長い小さな便箋を取り出し、ペンをインクに浸した。一瞬躊躇したが、意を決して、何かを書き始める。文章は、出来るだけ短いものにした。あんまりだらだら書いていたら、夜が明けてしまうだらう。アデルは殆ど走り書きに近い、らしくない乱雑な字でさつと書き終えると、丁寧に小さく折りたたんだ。

リビングにいくと、案の定、誰もいない。灯りが消えていたことからして、みんなもう自分の部屋に引き上げたようだ。アデルは、

テーブルの上に折りたたまれた便箋を置いた。

途端、様々な感情が、渦を巻いて身体の奥底からこみ上げてきて、いてもたつてもいられなくなつた。

哀愁、後悔、怒り、不安、緊張、恐怖、戸惑い、愛しさ、寂しさ、義務もろもろの感情が、渦を巻いて激しさを増す。身体がバラバラに引き裂かれるような痛みが、何度も全身を走り抜ける。

今ここで、何もかも破り捨てて大声で泣き叫びたい衝動が、体中を駆け巡る。

アデルは、静かに佇んだまま、制御できなくなつた激しい感情の渦と必死に闘つた。いつの間にか握り締めてい拳に、力がこもる。息が荒い。落ち着こうとして、深呼吸をしてみたが、上手く肺に空気がいかない。頭がおかしくなつてしまいそうだ。

しばらくして、何とか泣き叫びたい衝動からは脱した。アデルはもう一度、落ち着こうと深呼吸を繰り返す

不意に、涙が一つ、青白い頬を伝って、テーブルに落ちた。自分でも驚いて、涙の通つた後を指でなぞる。確かに、湿つていた。

しかしそれに続いて落ちてくる滴は、ない。それだけだった。たつた一粒。

誰にも気づかれず、アデルはこの家、この家族、この村 これまでの全ての思い出と、別れを告げた。

これで、もう一度と後戻りはしなくていい。

アデルは、濡れた頬を拭うと、前を見て、息を吸つた。気分が少し、すつきりする。

アデルは便箋を置いたほうを一度も見ずに、自分の部屋へ戻つた。明日には、出発することにした。

時刻は、五時三十分・・・いつもと同じ朝だ。

アデルは、この平凡な朝に、これからとても危険な場所へ宝探しに行くなんて、まだ信じられなかつた。

「魔術師・・・」

アデルは、一音一音はつきり発音しながら、小さく呟いてみた。やつぱり、「魔術師」という言葉はしつくりこない。大きくため息をつくと、またドサリとベットに倒れこんだ。

ふと、何かの気配を感じ、起き上がつて辺りを見回してみた。誰もいない。

「？・・・・・」

確かに気配が感じられたのに。

アデルが魔術師になつたあの日から、アデルの五感は、人並み以上に鋭くなつた。気配を感じて、後ろに誰もいなかつたことなど、初めてだ。

「おい・・・魔術師アデル」

突然真上から、揶揄を含んだような、それでいて少しイラついてるようなガラガラ声が響いた。アデルは驚いて天井を見あげた。何かが、シユツヒ、すごい速さで動く。

「！？・・・・・」

今まで聞いたことのない声だった。

「だ・・・・・誰？ 誰かいるのか？」

アデルは、今度は背後から間近に声が聞こえた。
さく問い合わせみた。

何も起きない。

やはり空耳かと思い始めたとき、今度は背後から間近に声が聞こえた。

「おい・・・・・俺様に向かつて誰だとは何だ！ 新米魔術師の

くせに」

アデルは全身に鳥肌がたつた。

「なんだ？ また魔術師になつた証の焼き印みたいなものか。

アデルは覺悟を決めてゆっくりと首を回し、声がしたところ見てみた。

「う・・・もり・・・？」

とても小さなこうもりが、アデルを見上げてゐる。グリグリとした金色の瞳が氣味悪くギラリと光つた。

まさか・・・・・こうもりが喋るわけな

「このもりが喋らないなんて誰が決めたんだ！ あ？ 言ってみろ！ ・・・つたく、世間知らずのガキンちよが！ 僕様はこいつやつて話してんじゃないか！」

アデルの心中を見透かしたように、このもり（？）はすぐさま怒り狂つて否定した。

「確かに・・・・・こうもりが・・・・・喋つてる！？」

アデルは心底驚いて思いきり後ずさつた。このもりのよつたものは早口で言つたが、アデルはこうもりの大きく裂けた口が、それに合わせて素早く動くのを、はつきりと見たのだ。

このもりは、アデルの反応に満足そうな意地汚い笑み浮かべ、少しきすんだ金色の瞳で、アデルの顔を覗き込んだ。

「おいお前、驚くタイミングがおかしいぞ。やっぱりまだまだ新米魔術師だな。ふん！ 僕様がそういうこともまとめて教え込まなきやならんようだ。こりゃ大変だ・・・・・」

大変などといいながら、このもりはなんだか楽しそうだ。

ちょっと待てよ、このもりが言つた「教え込む」つて、いつたいどういうことだ？

「つもりはバサッと畠を舞い、アデルの目の前のベットに着地した。「お前、名前はなんだ？ ジヨンか？ ボブか？」 ほらさつさと答えるよ」

アデルは突然の問いかけに戸惑い、一瞬自分の名前を忘れかけた。

が、すぐに思い出し、金色の不気味な瞳を見ないように、出来るだけ平静を装つて言った。

「アーテル・ノードリー。君は・・・・名前なんであるの？」

「なんと無礼な！この俺様に立派な名前がないとでも思ったか？こうもりが怒り狂つて大声を出した。アーテルは慌ててこつもりに囁いた。

「あの・・・・ごめんなさい・・・・悪かったよ。分かったからその・・・・あまり大声を出さないで。母さんが起きてきて、パニックになっちゃう・・・・」

こうもりはそれを聞くと、少し落ち着いて怒鳴るのをやめてくれた。
「・・・・ふん。いいだろ。お前のお袋が俺様を見て、外におっぱり出されるのも困るし　いいか、よく聞け。俺様の名前は、ディスパーだ。姓はない。姓など要らん・・・・そんな面倒なもの。　人間は、姓というものを盾にして有名になる奴がいるが、インプにとっちゃ、そんなもんでも有名になつたって嬉しくもなんもない。いいか、名声や栄光は自分の手でぶん捕るもんなんだ。だから姓をもつ人間は、俺様達異界の者たちから下等生物として見られるんだぞ」

こうもりは小さな胸をいっぱいに張つて自慢した。

アーテルはこんなこつもりにも名前があつたんだと、少し意外に思つた。

「なんだ？　俺様に名前があつておかしいか？」

こつもりはまたアーテルの心のなかを見透かした。アーテルは不思議に思つてこつもりに問うた。こつもりはそれを聞くと目を見開き、また大声を出しそうになつたが、さつきの話を思い出し、小さめの声で怒つたように言い始めた。

「まさかもなにも　当たり前だ。俺様を誰だと心得る。異界からの使い、インプ様だぞ。しかもインプの中でも階級の高いものだ。新米魔術師の心の中など簡単に見透かせる」

ディスパーはここで一度切つて、アーテルの顔を見た。

「テレパシーを使えるってことだ。ま、お前が一人前の魔術師になつた暁にやあ、そういうこともできなくなるがな」

「イ・・・・インプ？」

アデルは聞きなれない言葉をきいて、思わず聞き返した。こうもりはまたもや目を見開いた。

「お前、インプも知らないのか？・・・・・つたくしょうがねえ奴だな。・・・・インプは、異界の小悪魔のことだ。分かるか？ ちょっとした魔術も使える。新米魔術師が生まれるとインプが順番にこの世に来てお前らに魔術を教えたり、しもべとして下につかえる。

言っておくがな、俺様はお前なんかのしもべには死んでもならないつもりだからな。覚えとけ！ ま、大半の魔術師は魔術の力を得た後すぐ死刑にされちまうから、最近は俺たちインプの出番もなくなってきたわけよ。わかつたか？」

こうもりはここで言葉を切り、疲れたとこりようつに布団の上にストンと腰を付けた。

「異界からここまで、一気に来て疲れてるんだからあんまり話しかけるなよ・・・・」

ディスパーは小声で言った。

アデルは今のこうもりのグチを無視して、さつきの話を頭の中で整理していた。

ふと、アデルの頭の上に一つのクエスチョンマークが浮かびあがつた。

「ちょっと待つて。君、インプなんだろ？ なりどりしてこいつなんかの姿になつてるんだよ」

「これか？」

ディスパーは、こうもりの羽の部分を指した。アデルが頷くとディスパーは少し得意げに話し始めた。

「これは、俺らインプがこの世に降りてくるときこ、そのままの姿じゃあ目立つて落ち着いて魔術を教えることができなくなるからだ。それに、俺たちの本当の姿を見たら ヒヒッ・・・・お前ら人間

は、腰抜かしちまつよ。だから降りてくるときは、何かの動物、もしくは小さな虫みたいな目立たないものに姿を変えてくるんだ。そういう法律がある。俺様の場合、このこうもりの姿が一番居心地良かつたんで、このこうもりの姿のままなんだ。さあそろそろ質問攻めはやめてくれないか？　じつとしてるのは俺様の性に合わん。さつさとこの家を出るぞ」

アデルはハツとして時計を見た。もう五時五十分・・・母さんたちが起きてくる時刻だ。アデルは急いで枕元の荷物と着替えに手を伸ばした。それと同時に上方からガチャリと部屋の扉が開く音がした。思った通り、母さんが起きたした。

アデルは急いで階段を駆け下りた。

「アデル？　アデルなの？」

母さんの声が近づいてくる。アデルはテーブルの上の便箋を確認し、台所からパンと水をひつたくると、玄関を飛び出した。鍵は持たない。もう必要ないだろう。

扉の隙間から、母さんのブルーのネグリジェがちらりと見えた。

「おい。俺様が肩に居ること、忘れてないだろうな。さっきから五回も落ちそうになってるんだ。もうちょっと気の利いた歩き方をしろよ」

アデルが歩き始めると、すぐにティースパーがグチをこぼした。

アデルとインプは、イースタンビレッジの終わりの場所まで早足に向かっていた。ティースパーは囁々しくもアデルの肩につかまりながら、さつきから文句をぶつぶつ言っている。

「つるさいなあ、急いでるんだから

アデルは腕の時計を確認し、そろそろイースタンビレッジの住人が起き出してくる時刻になつていていたことに気がついた。

「あの ディスパー、予定より時間が遅れちゃったから、少し走るよ。いいね？」

アデルは自分の肩の上で未だ懲りずに文句を言つていたこつもりを黙らせ、初めて呼ぶ相棒の名前に少々戸惑いながらも言つた。

しばらくすると、ディスパーは肩の上でゆすられていてが嫌になつたらしく、羽をバタバタとさせてアデルの前に飛び出した。

「それにしても おい新米魔術師、どこに行けばいいのか分かつてんのか？」

しばらくして、ディスパーが疑わしげに問いただした。

「分かつ・・・てるひ。國、王から、地図を、渡、それで、あるから」

アデルは走りながら途切れ途切れに言つた。

「・・・・地図？ 国王？」

ディスパーは、そんな話聞いていないぞといつよつと顔をしかめた。

「どういうことだ？」

「ちょっと、待つ・・・・て、いつたん、止まつて、歩き・・・・ながら話す・・・・から」

アデルは走る足の速度を緩め、止まつてぜいぜいと息を吐き出しだ。

ディスパーはアデルが急に止まつたので驚いて急ブレーキをかけた。

「あぶねえな。急に止まるなよ」

「君が話しかけてきてまともに走れないからだよ。・・・でも、もうすぐイースタンビレッジも村境のほうだから、走らなくて大丈

夫」

「あつそ。で？ 何だよ国王とか地図とかって。俺様はそんな話、全然きいてないぞ」

ディスパーは不満そうに言つた。

「君、異界に居るときに聞いてこなかつたの？ ・・・・君つて僕

のことよく知つてたから、宝探しのことも聞いてるんじゃないかと

ディスパーはチッと舌打ちをするとアデルを見つめた。

「宝探しのことはチラッと聞いてるわ。けど、それがなんでこの国の王と関係するかが分からん」

アデルはハアとため息をついて歩きながら、今までのことをかいつまんでインプに話した。

話し終えると、アデルはディスパーを見つめ、反応を見守った。

「その国王、怪しいな。何か裏にありそうだ。ん？・・・・アデル、気をつけたほうがいいぞ」

「え？」

といつたときには、もう遅かった。

身体が軽くなつたと思つた次の瞬間、アデルの尾骨に激しい痛みが走つた。

「つ・・・・痛つてえ！」

アデルは情けない声を出して、涙で霞む目を上に向けた。何メートルか上方で、ディスパーが見下ろしている。

「おーい、大丈夫があ？・・・お前鈍感だなあ。俺様がちゃんと氣をつけるといつたのに」

アデルはムツとして言い返そと口を開きかけたが、人の足音が聞こえたので、慌てて喉まできた言葉を飲み込んだ。ヒュツという音は、ディスパーが人間離れ、いやこうもり離れしたものすごい速さでどこかへ隠れた音だろう。アデルは落とし穴らしきもののなかで、目をつむりながら、どうかあの足音が人食い人種のものではありませんようとに祈つた。

「へへ。つかまつたようですね。この深い穴ならあいつだって抜け出すことはできないでしょ」

上からかされた男の声が響いた。アデルは閉じていた瞼をそつと開いてみた。

「当たり前だ。このジャッキー様が作った穴だ。やつとあのコソ泥をハつ裂きにできる。はつはつは

アデルはハツ裂きという言葉でひやりとした。まさか、本当に人食い人種？

「さて、捕まえるとするか。あいつだって、もう逃げられやしない」「二人の男の満足げな笑声と共にしごが下ろされた。

アデルは恐ろしくなつて隅のほうへ後退り、もう一度両手で目を覆つた。

！

「ありや？　・・・お前さん、誰だ？」

すっとんきょううな声をあげて、男はアデルに近づいてきた。

「・・・へ？」

アデルは両手の隙間からそつと目を出して目の前の人を見た。

普通の人。見たところ、がっしりとした体格で、ひょろひょろとしたアデルなんて握りつぶせそうだ。しかし、どうみても人食い人種にはみえない。アデルは両手を下ろして、大きく安堵のため息をついた。よく考えてみれば、イースタンビレッジとノーザンビレッジの境に、ジャングルなんて無い。

「大丈夫か？　坊主、どうした。ほれ、もつとにこっちに来てみな。なにとつて食いやしねえから」

男の太い腕がアデルを捕まえて引き寄せる。

「ん？　坊主、見ねえ顔だが、どこからきた？」

アデルは慌てて立ち上がりつてできるだけ礼儀正しく自己紹介をした。

「あ　僕はイースタンビレッジから来ました。名前はアデ　　い　えジョン・・・えつと・・・ジョン・ハッターです」

アデルは危うく本名をいいそうになり、ひやりとした。国王から、旅のことや、アデルの個人情報は極秘だと、厳しく忠告されているのだ。

「ほう。イースタンビレッジから。あの魔術師が生まれたつていう不吉な村ねえ・・・」

アデルは不吉な村といふところでカチンと来たが、必死で我慢して笑顔を作った。

「はい。ここを通りうとしたら、落ちちゃって。その……すみません」

「はつはつは！ いいんだ、坊主。すぐ上に上がらせてやるから」

男はがつしりとした大きな手で、細くて色白なアデルの手を取った。

「おーい。ジャッキーさん。どうしたんスか？ あのコソ泥、捕まえました？」

上からさつきのかすれ声が聞こえた。

「いや、あのコソ泥じゃねえ。ちつさい坊主が間違つて落ちちまつちたんだ。今引き上げるから、手伝つてやれ」

ジャッキーと呼ばれた男が、アデルを引きずりながら大声で叫び返す。

アデルは再び太陽の元に戻ると、久しぶりに安堵感にひたつた。

「で？ 坊主。お前このノーザンビレッジになんの用だ？ ん？」

家出か？ 迷子か？」

男はさつそくアデルに問いかけた。

「え・・・えっと はい。あの、家出です・・・」

アデルは仕方なく嘘をついた。

「はつはつはつは！ そつか！ 家出か。まあいいぞ。宿は一応俺んところにしな。しばらくは宿代なしでもいいぜ。決まりだ！ 俺は先に行つてるから、こいつに連れてつてもらいな。本当は今、仕事中なんだ。女房にまかせ切りじゃあ、あとで酷いからな」

男は勝手に決めて、アデルにお茶目にウインクを残すと、さつさと行つてしまつた。

アデルはしばらく呆然として大声で笑う男の背中を見届けた。

「・・・・・つたく。おい坊主、ジョンとかいつたつけ？ 俺についてこい。ジャッキーさんの宿まで、連れてつてやる」

もう一人のかすれ声の男が言つた。

「あ はい」

アデルは茂みに隠れていたディスパーに目配せをして、男の後を追つた。

「俺の名はダンだ。さっきの人が、ジャッキーさん。おれはジャッキーさんの向かいで、果物を売ってる」

男は早足でせかせかと前を歩きながら、アデルに説明した。

「・・・そつなんですか。・・・・それでの、さっきの落とし穴は、いつたい何なんでしょうか」

アデルが質問すると、ダンは急にピタリと立ち止まり、鬼の「」ときの形相で振りかえった。アデルは驚いて、無意識に後ずさる。

「え・・・す、すみません」

男はアデルの言葉を無視して怒りで震える声で話した。

「あの落とし穴はにつくき、コソ泥ネコのもんだ。あのクソにゃんこ、毎晩毎晩うちのりんご盗みやがって！ 村の皆も迷惑してんだ。不吉な黒猫め。今度こそひつつかまえてやる！」

吐き捨てるように言つと、ダンはまたもとの方向を見て、ズンズンと歩き始めた。アデルはダンの反応に戸惑いながらも急いで後を追う。

しばらく行くと、ノーザンビレッジの賑やかな市場が見えてきた。ノーザンビレッジでよくやっている、骨董市のような店が、道の隙間なく開かれている。溢れんばかりの人々が、興味津々といつた様子で商品眺め、手にとつて感触を確かめたりしていた。人が多いので、盗人や喧嘩が頻繁に起るのが欠点だが、殆どの人は、この窮屈な買い物を大いに楽しんでいるようだ。そばの店で、陽気な売り子が客に話しかけ、商品の交渉が行われている。アデルは見ているだけで、わくわくしてきた。なにしろほかの村の様子を見たことなど、これが初めてだ。ノーザンビレッジは、すごく賑やかで、食べ物ならどの村よりも質がよく新鮮で美味しい。それに、いろいろな国からたくさん輸入しているので、何でもあると評判だった。

「・・・・・随分、賑やかですね」

アデルは思わず口に出していた。するとさつきまで機嫌が悪かつたダンが、にっこり笑つて嬉しそうに喋り始めた。

「そうだろう。もつと奥まで行くと、もつと賑やかになるぞ。ジャ

ツキーさんの宿ももう少し行つた先だ。俺も、この辺りにに住んでるんだ。果物屋でな。こここの食い物は、この国で、いや世界中で一番うまいといわれてるんだ。種類も豊富だしな。なにより、美味くて新鮮！　ああ、そっちの村でも有名だらう一度食つたらもうこの村に居たくなる。ここは最高の村だよ。さ、もう少しだ」アデルは今まで、自分の村が一番だと思っていたが、どの村の人も皆そう思つてゐるのだと、と初めて知つた。

そこからは、同じような賑やかな店が立ち並ぶばかりで少々退屈してきたアデルは、ふと横の景色な目を移した。すると、イースタービレッジの見覚えのある家々が小さく見え、そしてその右側の奥には、ノーザンビレッジの商店街にはされて、アデルがこれから行くことになるまさにあの「怪物の洞窟」が見えた。アデルは瞬時に青ざめて、急いでリュックの中から地図を取り出し確かめてみた。やつぱり、間違いない。あそこが「怪物の洞窟」だ。

アデルが青ざめて立ち止まつてゐると、先をズンズン歩いていたダンが戻つてきて、怪訝そうにアデルの顔を覗き込んだ。

「どうした？　何やつてんだジョン？」

アデルはハッと我に返り、咄嗟に地図を後ろに隠した。

「な、何でもありません。大丈夫です。・・・・さ、行きましょう」ダンは不思議そうにアデルの後ろを気にしたが、肩をすくめると、すぐ歩きはじめた。

危ない危ない・・・・こんな人に「怪物の洞窟」のことなんて聞いたら、また機嫌を悪くして僕が行くのを引きとめるだらう。拳句の果てに、僕が魔術師だつてことも、知られてしまうかもしれない。そしたら王宮に通報されて、旅は失敗。僕はきっと、すぐに死刑だ。そして、母さんや父さん、アルまで

「おい、ジョン！　なにボーッと突つ立つてんだ。もうジャッキーさんの宿の前だぞ。」

アデルはビクリと身を震わし、ダンのほうを見た。

「ほら、あの看板を見てみる。きっと一生、忘れられなくなるぜ」

アデルはダンの言葉に疑問を抱きながら、細長い指の指す方向に顔を向けた。そしてアデルは、その看板を手にしたまま、口をポカンとあけ、硬直してしまった。

ダンの言つた意味が、今になつてひしひしと理解できる。

アデルの見上げた先には

「ジャッキー！」

といふどでかい看板が、てかてかと光っていた。

「ジャ　　ジャッキー・・・？」

アデルは目を見開いて呟いた。ダンは呆れ顔で、溜め息混じりに説明した。

「ジャッキーさんは、自分の名前がすぐ氣に入つててな。ついに店の名前までジャッキーにしちまつたんだ。ジャッキーさんによると、自分の名前は、女房との宿の次に愛してゐるつてさ。ジャッキーさんの名前を付けた名付け親の叔母さんにも、ひどく感謝してた。・・・・まつたくおかしな人だよ」

ダンは呆れながらも、親しみのある優しげな笑い声をあげ、突つ立つたままのアデルを背を押して、大きな扉を開けさせた。

ジャッキーの宿は、思つたよりも大きかつた。中に入ると、調子の良い音楽が耳に飛び込んできて、同時に楽しげな人々の笑い声や話声が、あちこちで飛び交う。それに、皿がカチヤカチヤいう音や、料理の注文をとる女性の威勢のいい声が重なり、ここは外より賑やかだ。後ろで扉が開く音がして振り返ると、ダンが帰るところだった。アデルはダンに向かつて軽く会釈をして送り出すと、ディスパークをマントで隠しながら、そろそろと奥に進んでいった。キッチンは二つあるらしく、狭い廊下の左右から、なんともいえない、いい香りが漂ってきた。アデルが右側のドアの取つてを掴んだ途端、ドアが勢いよく開いた。

「あいた！」

アデルは鼻と前頭部を強く打ち、よろめきながら涙目で前を見た。

ひげもじやの男が、大きなお盆を幾つも抱えながら、アデルの顔を

覗き込んでいた。それが、この宿の主であることに気づくのに、数秒かかる。ジャッキーは、アデルが誰か分かると、にっこり笑つて至近距離なのにも関わらずどでかい声で言つた。

「おうジョン！ よくきたな！ お前の部屋は一階の一一番奥だ。あとで夕飯持つてつてやるからな。待つてろ。今俺は忙しいから、詳しいことは明日、教えてやるから」

ジャッキーはアデルが何か言つ隙もなくいうと、食堂のほうへ足早に向かつた。ディスパーがもぞもぞと動いたので、アデルは慌ててマント抑えながら階段を駆け上つた。

「お前、どうすんだよ。あの怪物の洞窟はもう見えてたじやないか。こんな宿に泊まつたつて、金の無駄だ。サッサと宝を探しに行かなきや。とりあえず、一個目の宝石を見つけてからじやないと、なんのための宝探しなのかさっぱりだ。それに俺様も早くお前の魔力がどれだけなのか見てみたいしな。・・・おい聞いてんのか？」

部屋に入ると、ディスパーが詰めていた息を吐き出し、勢いよく喋りだす。アデルはふかふかのベッドに倒れこみながら、ディスパーの話を何とか頭に入れながら聞いていた。

「大丈夫だよ、ディスパー。お金はしばらくかからないらしいし、ちょっとくらいこの村にいてもいいだろう？ ・・・・僕、ノースビレッジにはずっと前から行つてみたいと思つていたんだ」

ディスパーはため息をついて、アデルの目の前に着地した。

「お前は呑気だな。これから危険で恐ろしいと所へ行くつていうのに・・・ま、それは置いといて。俺様が気になるのは、あのダンとかこの宿の主、村の者たちが捕まえようとしてた、「ソ泥ネコつて奴だ。そいつになんか引っかかる。いくらすばしつこい猫だつて、村中の食い物を盗み出して、誰も捕まえられないってのはおかしいだろ？ 僕みたいに、インプが猫に変身したか、あるいは動物人間か・・・そういう可能性はあるな」

アデルはそれを聞いてがばりと起き上がつた。

「へ、変身する人間なんて、いるの？ ましてや動物になんか・・・

・インプだつて、魔術師が生まれたときにしか、異界から降りてこないんだろ？」

ディスパーはすぐさま答えた。

「変身人間だつているさ。この世界にはインプだつているんだからな。そだ？ インプも、強い力を持つたインプなら悪戯をしに時々降りてくることもあるんだ。 人が気づかないだけで、インプや変身人間は、結構いるぞ」

「へえ・・・」

アデルは驚いて口をポカンとだらしなく開けた。

「じゃ、今、僕らのまわりにインプや変身人間はいるの？」

アデルは辺りをチラリと見やり、不安そうに言った。

「いや。もしそいつらがここにいたら、この俺様がとっくに妖気で見つけてるさ。人間界に勝手にこれる奴らは皆力があるから、妖気が溢れるほどあるんだ」

「ふーん・・・・じゃ、大丈夫なんだ。ね、ちょっとの間でいいから、ここに居させてよ。最近はいろいろびっくりすることが続いて、疲れてるんだ」

アデルは大きく伸びをしながら弱々しく言つた。

「ふん！ 勝手にしやがれ！」

ディスパーは言いながらベットの端に寝転がつた。

「なんだ。君だつて疲れてたんじゃないか・・・」

アデルはもう一度、ベットに倒れこんだ。

「おい・・・おいアデル！」

ディスパーが騒がしく少年の名を呼んだ。

「・・・なに？ 眠いのに・・・まだ夜だろ？」

アデルは真夜中にたたき起こされて不機嫌に言った。

「もう朝方の三時だ。とつぐに昨日から今日になつてゐぞ！ 月だつて、東に傾き始めてるぜ！」

ディスパーは珍しく興奮しているようで、少々意味の分からないとを口走つた。

「ディスパー。月は東から西へ動くんだ。明け方の三時なのに東に傾くわけな」

「わかつたわかつた。いいからとにかく外を見てみる。きっと、腰抜かすぜ」

ディスパーが鼻息荒く急かすので、アデルは寝ぼけ眼で窓の外を見つめた。瞬間アデルの眠気は一気に吹っ飛んだ。それもそのはず、一匹の巨大なトカゲに似た怪物が、商店街の中をのた打ち回つていたのだ。住民は大騒ぎで、悲鳴を上げながら逃げ回つてゐる。勇敢にも大きな斧を持つて巨大トカゲに立ち向かう男たちもいたが、すぐさま強烈な尾っぽのパンチが飛んできた。男たちは四方に飛び散つて、うめき声を上げ始める。

「うつわつあ！」

アデルは思わず声を裏返した。

「な？ な？ すごいだろ？」

ディスパーは窓にべつたりと張り付いて、瞳をぎらぎら光らせている。今まで一番酷い顔だ。

「な、なんなんだよ、あれ。氣味悪い！」

アデルも窓にべつたりとくつ付いた。

「ふむ・・・・ありやあインプだ。つてことは、俺様の仲間だぞ。ふふん、まあ少しばかり力みすぎた異界の使いつてことだ。悪戯にでも来たんじゃないか・・・面白そうだな。なあ行つてみよつぜ」

ディスパーは早くも扉の方に行つてゐる。

『なるほど。だからディスパーは興奮してたのか』

アデルは頭の端で、ちらりと思つた。

「そりだ当たり前だ。俺様の仲間が田の前にいるんだから、興奮して何が悪いんだ。ふん！」

ディスパーはぎろりとアデルを睨んだ。

『しまった。ディスパーは人の心が読めるんだつけ

「ああ！ ややこしいからいろいろなこと考えるなよ。俺様には嫌でもわかつちまうんだから」

こうもりはじれったそうに言った。

「・・・分かった。気をつけるよ」

アデルは肩を竦めて素直に謝った。早めに謝つておかない、ディスパーはすぐ根に持つてすねるからだ。そう思った途端、アデルは首を傾げた。自分はこのインプと、たつた一日しか過ごしていないのに、何故かこの小さな旅の道連れのことを、まるでずっと昔からの友達だったかのように、たくさんのこと知つていていたことに気づいたのだ。

「よし！ 分かつたならいいぞ。この騒ぎに巻き込まれて怪物の洞窟にいけるかもしれないしな。うん」

ディスパーの怒鳴り声にハツとして、アデルはまだ少しぼうっとしながらも曖昧に頷いた。

だしていった。

「え ちょ、ちょっと待てよ！」

アデルは慌てて上着とリュックを持って、ディスパーの後を追つた。

外は寒い上に、かなり荒れていた。多くの村人はすでに逃げる用意をして、いつでも村を出でていけるようにしている。ジャッキーのおかみさんは、勇敢にも夫ともに巨大トカゲを睨みつけ、木の棒（驚くほど太い）を振り回している。

アデルは、巨大トカゲを間近で見て呆然とした。宿の窓越しに見るより巨大で、前長二十メートルはあるだろうと思えた。トカゲはおかしな奇声を発して村人を威嚇しながら、店の食べ物を食つている。

その毒々しい、モスグリーンの皮膚は、ぶかぶかのトレーナーのように垂れ下がり、動くたびブルブルと気持ち悪く揺れる。口は驚くほど裂けていて、その避けた口から、血のよう赤い一股の舌が、行つたりきたりしている。

アデルは、この大変なときによくも僕は眠つていられたな、と呑氣な自分に驚いた。

一方ディスパーは、生き生きとした表情で巨大トカゲを見つめ、沼のようになどんよりと曇った焦点の合わない視線を自分にむけようと必死に追い回している。アデルはしばらく、ディスパーと巨大トカゲの滑稽な様子をぼんやりと眺めていたが、不意に人の気配を感じ、初めてダンが隣に来ていたことに気づいた。ダンはアデルが自分に気づいたと分かると、腰をかがめて囁くように話し始めた。

「あのトカゲみたいなぎょろ目の怪物、何だか分かるか？ 僕は多分……いや 有り得ないな……あいつが此処に、くるわけがない……まあとにかく、夜中にいきなり現れて、商店街の食いもんを荒らし始めたんだ。食いもんを全部食われちまつたら、俺らの生活もできないし、ノーザンビレッジの評判も落ちちまう。……あのコソ泥ネコに加えて、厄介なやつが来たもんだ。見ろよ、あの無敵といわれたジャッキーさんまで苦戦してやがる。・

…………これ以上酷くなるんなら、俺はこの村を出て行くつもりだ。いくら最高に良い所でも、こんな恐ろしい怪物や「ソソ泥ネコ」がいたんじゃあたまつもんじゃない。頭がいかれちまうよ」

どうやらダンは、愚痴をいいに来たらしい。アデルは適当に相づちをうち、巨大トカゲと村人の戦いを眺め始めた。不思議なことに、自分への危機感は、全く感じなかつた。しばらくすると、ダンは愚痴を他の人にも言いに行こうと、アデルの傍から離れ、同じように荷物を背負つたおじさんのところへ行つた。

ダンが行つてしまふと、ふと、アデルの頭のなかに「魔法」という一文字が浮かんだ。

そうだ。僕は魔術師なんだ。まだ、たつた一度もちゃんとした魔術も使えないまま、無理矢理この旅に出された。

…………僕はいったい、どんな魔法が使えるんだろう。僕の力で、ここに居る怪物を倒せるんだろうか。この人達を、この村を救えるんだろうか。

アデルは急に、今ここで魔法を使って、巨大トカゲを倒してみたくなつた。

心臓がドクドクと脈打ち、鼓動が早くなつていくのが分かる。自分の研ぎ澄まされた五感が更に鋭くなる。辺りの様子が、手に取るようになかつた。トカゲの振り回す尻尾が、空を切る音、村人たちの叫び声や、呻き声、建物の崩れる音。全てがアデルのためにあるかのように、あらゆる音、感触が身体の全ての部分から、沁みこんでくるようだ。

力が、湧き上がる。今なら、魔法が使える! 確信だつた。
ダメだ・・・・・こんなところで魔法を使つたら、すぐに魔術師だ
ということがばれてしまう。

ほんの少し残つていた、自分の中の冷静な部分が、警笛信号を発している。

・・・・・この旅は極秘だと、国王に言われたじゃないか・・・・・
これらえ。

そう思つた途端、先までの興奮が、嘘のよつに消えていく。

「危ない！」

突然アデルの背後から、悲鳴に似た叫び声が聞こえた。ハツとして我に返り目の前を見ると、トカゲの巨大な尻尾が、アデルめがけて勢いよく飛んでくるところだつた。まさに絶対絶命。

この状態では、思いきり宙を舞つて大怪我をするだろつ。いや、怪我ではすまないかもしない。アデルは、トカゲの巨大な尻尾が飛んでくるのを、切羽詰つた状況にも関わらず、スロー・モーションのようにゆっくりと見ていた。そう、さつき確信したときと同じ感覚反射的にアデルはしゃがみこみ、思わず両手で頭をかばう姿勢をとつた。

もうダメだ！

「バーン！」

耳元で、鼓膜が破れるほど音がし、アデルは一瞬、意識がとんだ。しかしすぐに意識を取りもどし、慌てて次の爆音に備えようと耳に指を突っ込んだ。耳はギュッと瞑つていて真つ暗なはずなのに、目の前がチカチカする。頭が痛い。ものすごい風も吹いて、何かとても重いものが、はじけ飛び感じがした。

僕は飛ばされたんだろうか　いや違つた。アデルはしつかりと土を踏みしめて、さつきと同じ姿勢のままだ。耳が元のように聞こえていることに、しばらく気づかなかつた。辺りは、信じられないくらいシーンとしている。

ゆつくりと、立ち上がる。すこしよろけたが、大丈夫、怪我はしていないようだ。辺りを慎重に見回してみて、不意に気づいた。辺りがぼやけて見える。

アデルは、自分の周りに薄ピンク色の、丸い膜が張つているのに気づいた。その膜が揺れて、周りがぼやけてみえたのだ。村人は皆アデルに注目していた。前を見ると、信じられないことにさつきまで暴れまわっていた怪物が、かなり遠くの道まで飛ばされて、ぐつたりとしている。

いつたい何があつたんだ……？　トカゲは、僕がやつたのか・
・・・？

アデルは不意に、自分がとても恐ろしいことをしたような、言い
ようのない不安を覚えた。頭はパニック状態で、何があつたのか、
まるでわからない。アデルは胸を押さえ、Tシャツをギュッと握つ
た。落ち着け、アデル。まずはディスパーを探して、何があつたか、
聞かなくちゃ。

気がつくと、あのぼやけた薄ピンク色の膜は消えていた。

「なんだ、今のは・・・」

村人の一人が呟いた。

静まり返つた商店街では、その呟きがやけに響く。次第にある集
団にざわめきがおき、次々と広がつてあつという間に人々は騒ぎ始
めた。

「今の見たか？　あの怪物が一瞬で飛ばされちまつた。・・・まる
で・・・魔法だ」「でも怪物は死んだみたいだから、良かつたわ・・
・・・あの子何者かしら」「あーあ。俺の店がめちゃくちゃだ」「
まさか、魔法なわけないだろ？」「・・・隣村のイーストで、魔
法使いの子が出たつて言つ話も前にあつたじやないか・・・」「
早くしろ！　魔術師だ！」「王宮に連絡をとれ！　今すぐ追つ払つ
てもらわなきゃ　おい押すなよ」

アデルはそんな話を耳で受け流し、ぼんやりと肩を落として佇んで
いた。身体に力が入らない、自分の手足が、他人のもののように感
じる。重い・・・・・・・

何度か、足を踏まれたり耳もとで何か怒鳴られた気がしたが、ア
デルに直接触れる人は一人もいなかつた。ジャッキー・ダングが、混
乱の色を燈した目でアデルを見ながら、何も言わず通り過ぎて言つ
た気もした。そのまま人混みに流されて、アデルはいつのまにか、
巨大トカゲの前まで來ていた。

「よう！　アデル、すっげえなお前」

アデルは、真下からの拍子抜けた声に、飛び上がつて尻もちをつい

た。

「！ デイ、ディスパー。君、無事だつたの？ そうだ さつきのは一体何？ 僕がやつたこと？」

アデルは急いで立ち上がりながら、近くに人がいないのを確かめて、小声で言つた。

「ふうむ・・・・・あれは多分、バリアだな。うん」

ディスパーは突然考え込みながら言つた。

「バ、バリア？」

聞きなれない言葉に、思わず聞き返す。

「なんだお前、バリアも知らないのか？ ホントになんにもしらねえんだな、お前・・・・・」

ディスパーは面倒くさそうに言つ。アデルはむつとしたがそこは押さえ、ディスパーに早く説明するよつ急かした。

「バリアはな、魔術師になつた奴が、必ずもらえる能力だ。もちろん異界の悪魔様からな自分が危険にさらされたときにだけ作動して、ほとんど全てといつていい攻撃から守ってくれる。まあ簡単に言つちまえば、自分の身を守ってくれる不思議な膜つてとこだな。どうだ、分かつたか？」

アデルはいまいちよく解らなかつたが、先のことを聞きたかつたので曖昧に頷いた。

「それで・・・トカゲはそのバリアのせいで飛ばされたの？」

「そうだな・・・あいつはきっと、お前のバリアで飛ばされたんだ。

俺様が思うに、お前は多分風使いだ」

ディスパーはそこで一囁言葉を切り、さつぱり解らないという様子のアデルを見て、慌てて付け足した。

「聞かれる前に言つとくが、魔術師の中にも分類があつて、それぞれ得意とする分野があるんだ。一般的には、この五つがある火、陽、水、風、光。そして特別なものとして闇の力とその他の能力。その他の能力は、一般的な五つ以外の、珍しい力を持つ魔術師だ。こいつは滅多にいない。その他の能力を

持つているやつは、将来、三大魔法使いになつたり、あるいは、闇の魔術に目覚めて悪魔になつちまつたり まあ闇の世界にとっちゃ偉大なことらしいが とにかく歴史に残るような、偉大なことをすると言われている。しかしこの力は、遺伝とかの類は一切関係なくあるものだから、どんな魔術師でも可能性は十分にあるわけだ。もちろん、お前にも。 闇の力 は、その名の通り、生まれながらにして闇の魔術、たとえば 死の魔法だつたり、苦痛の呪文もまあ魔法界では一般に使つてはいけないことになつてる呪文の、殆どだ を身につけているものだ。だがこつちは、その力を持つている代わりに他の魔法が使えない場合が多いんだ その他的能力のある奴は、その能力以外にも一般的な五つの力を分類で強く持つていたり これは本当にごく稀なことだが、全ての魔術に渡つてものすごく優れていて、間違いなく歴史に残るような者もいる。だが 闇の力をもつ者は あ 最初はどんな魔術師も、その才能と魔力は持つていいんだ。たとえ、 闇の力 を持つていい奴でもな 自分は闇の力を持つていい、と本人が確信した時点で、知らずうちに必要のない魔力が消え、その分の力が闇の力に加算されるんだ。これは闇の力がもともと強い奴に多くある。 じゃあここでさつきの五つの分類の話に戻るが・・・・たとえば、お前は風使いだから、他の魔術師より風についての魔術が優れてい。さつきのバリアも大きく見れば風の魔法に入るから、お前が風使いであることは確信に近い

「え さつきのバリアって、強かったの？」

「ああ ありやあ、百年に一度だつて、滅多に見られないぜ」

「ふーん・・・・」アデルはあまり実感のないまま、先を続けるディスパーのほうに、耳を傾けた。

「まあ、バリアは自覚のないものだから、お前がピンと来ないのも解るが・・・・・ フム・・・・ お前は稀に見る その他の能力 者かもしれない・・・・」

ディスパーは咳くように言いながら、アデルの中の魔力を見透か

すかのように、真っ青な瞳をじろじろと覗き込んできた。

「ぼ 僕、魔力がそんなにあっても、迷惑だよ・・・ディスパー

ー、人の目をじろじろ見るのやめるよ すぐ居心地が悪い」

ディスパーは、アデルの言葉を無視して、一人で考え込み始めた。アデルはディスパーがとりあえず自分をじろじろと見るのをやめてくれたのでほっとし、こうもりからそつと離れた。

アデルは好奇心と恐れを入り混じらせながら、巨大トカゲの体に近づいた。トカゲの頭は、かなり先のほうまで垂れ下がっていて、大きなギョロ目はピタリと閉じている。身動き一つしない。本当に死んでしまったのだろうか。アデルはトカゲの尻尾の先を、そつとなぜた。 途端にアデルの全体に、やけに響くドスの聞いた声が、どつと流れ込んできた。

『俺の体から離れるな小僧。 僕は、インプだ。お前の横に居る、へなちょこの弱ちいインプと一緒にされちゃ困るけどな 僕はもつと妖力を持ったインプだ。お前がぶつ飛ばしたこのトカゲに乗り移ってる。名前はスター。あまり時間がない。唐突に言う。さつきのバリアの力で分かつたが、お前はかなりの魔力を持つている。ああ、生まれながらにして、だ。お前のことは、よく知ってる。異界でも有名だし、俺は昔、お前によく似た野郎の教育係をやっていた。・・・・ま、そんなこと、今は関係ない。お前の魔力は、魔術師のなかでも、相当な力だ。百年前に死んだ、風使いの力に良く似ている。お前も知ってるだろう? イーストビレッジにやってきた、伝説の魔術師を』

アデルは呆然として全身から血の気が引いていくのを感じた。

なんだ? こいつ・・・・インプ ?

もしかして、さつきディスパーが言つてた力の強いインプのことか・・・・。

でもそのインプが、僕に何の用だらう。しかもなんで、あの言い伝えの魔術師のことを知ってるんだ?

アデルは顔を歪めて、トカゲの全身に視線を滑らした。どこかに、

インプの妖気が溢れ出しているところがないか、見える範囲で探してみる。しかし、途中で別の聞きなれた声が割り込んできたので、アデルの思考は中断され、頭の中は大騒ぎになつた

『ようアスター。俺様の相棒になんの用だ?』

ディスパーだ！咄嗟にアデルは思った。

『……おやおや。裏切り者のディスパー様のお出ましかい？久しぶりだなあ……。千年前、お前に異界の牢獄に入れられて以來だ』

なんの話をしているのか、解らない。アデルは鈍く痛み始めた頭を抑え、苛々とインプの話に耳を傾けた。

『ああ。お前、いつ牢獄からでてきたんだ。力の強いインプだと思つたが、まさかお前みたいな囚人だつたとは……予想外だな』

さつきまで目を輝かせてトカゲの周りを飛び回つてたくせに、今その正体が分かるとすぐ態度をかえるな、ディスパーはアデルは一人の会話を黙つて聞きながら静かに思つた。

『で？ アスター、こいつになんの用だ?』

『……ふん、さすがだな。一番いいといふことを、突いてくる。じゃあ俺も、早速だが この小僧、かなりの力を持つてゐる。お前なんかにお守りをさせてるより、力のある俺が、こいつの面倒を見てやつたほうがいいと思つてな。まあ……簡単に言つちまうと、この小僧を俺のところにくれ。ということだ。分かるだろ？ こいつの力、あいつの能力とそつくりだ。アーウィン・ノードリーのな』

アデルは驚いて目を見開いた。アスターが言ったアーウィンとは、アデルの遠いご先祖様の名なのだ。百年ほど前に亡くなつたといわれているが、とても偉大な発明を幾つもした有名な学者だと聞かされていて、魔術師だつたなんて、思つてもみなかつた。それに、アスターはアーウィンのことを伝説の魔術師とも言つていた。まさか、伝説の人物が実在していて、しかもそれがアデルのご先祖

様？ そんなこと、ありえない。

アデルは混乱してきた頭をおさえ、インプの会話に聞き入った。

『・・・・』

ディスパーは「アーヴィン」という名を聞くと、途端に珍しく黙りこんでしまった。その様子に満足したのか、アスターは嬉しそうに嘲笑う。

『どうした？ 覚えているはずだろ？』

アスターはすっと口を開かないディスパーに調子をよくして、歌うようにアーヴィンの名を口にし始めた。

アデルは、今やガンガンと頭蓋骨に響く痛みに必死で耐えながら、どうしたことなのか考えた。しかし考えてみたところで、頭の痛みが酷くなるだけだ。

どういうわけか、インプたちがアデルの頭の中で言葉を交わすたびに、まるで頭を金棒で思いきりぶん殴られたような痛みが、何度も頭を突き抜けるのだ。アデルはとりあえず、自分の頭の中で何か言ってみることにした。早くこの痛みから、解放されたい。

『あの　あのう・・・・聞こえますか？』

すぐにはアスターの歌うような声が途絶え、それと同時に、ディスパーの息を呑む音がか微かに聞き取れた。

これでやつと、静かになった。

アデルは頭の痛みが消えていくを感じ、ほっとした。のもつかの間、すぐに頭痛がし始めた。

『こりやたまげた。こいつ、テレパシー能力も持つてやがる。どこまで『ごいんだ？ この坊主、本当に欲しくなつたぜ』

アスターが興奮気味に言ったのと同時に、ディスパーも割り込んできた。

『お、お前こんな能力も持つてたのか。早くもつと魔力を見てみたいもんだ』

二人同時に　いや、一匹同時に、しかも飛び切りの大声を頭の中で響かせられたアデルは、あまりの痛さに小さく呻き、気を失いそうになつた。

アデルはすんでのところで氣を取り直し、頭の中で一匹のインプに文句を言つた。

『・・・・二人とも、僕の頭のなかで大声出したりするのやめてよ。う・・・・死にそう』

『あ　ああ。悪いなアデル』

ディスパーがすぐに謝つた。すると、頭からすうーっと痛みが消えていくのをはつきりと感じた。どうやら一匹とも、アデルの頭の中にテレパシーを送るのをやめたらしい。

アデルはどつと疲れを感じ、その場にへたり込んだ。しばらくして顔を上げると、さっきまであったトカゲの巨大な尻尾は無く、ただ小さなトカゲが、アデルの青く澄んだ目を見上げていた。頭上で、パタパタを羽をばたかせる音も聞こえる。

「大丈夫か？　アデル」

こうもりが心配そうに言つた。

「本当は、人間の頭の中で長いことテレパシーを送りあうのは危険なんだ。ずっとやってると、その人間の体が弱つて、死んじしまう可能性もある」

アデルはそれを聞いて、首筋の毛が逆立つのが分かつた。文句を言おうと口を開いたが、何を言おうか考えていると再び頭が痛くなりはじめたので、すぐにやめた。

「・・・・しかし、インプとインプのテレパシーの会話に人間が入つてこられたのは初めてだ。すごいぞお前　で、お前、俺と組む氣は？」

アスターがすぐ話をそらした。

「ない！」

アデルは即座に答えた。

「はは・・・やつぱりか。・・・ま、いい。魔力のあるお前が嫌だというんなら、仕方無い。それにそろそろ異界へ帰らないとな。今頃囚人が逃げ出した！ つて大騒ぎしてるぞ。こりゃ面倒だ。ヒヒ

アスターは言葉とは裏腹に混乱を想像して楽しむかのように小刻みに身体を揺らした

「じゃ、俺は異界へ帰る。・・・お小僧、本当に俺と組む気は無いんだな？」

最後の最後までアスターは諦めが悪い。

「無いってば！」

アデルは思わず大声を出した。

「人の頭の中で大騒ぎしといで・・・僕が調子に乗って君と組むと思うかい？ 悪いけど、僕はそこまで人は良くないんだ」

「ああ分かったよ。もう諦めたさ！ ふん」

アスターが言い終わつたと思つたときには、もうその場にトカゲの姿は無かつた。

「あーあ・・・あいつがお前の世話焼き係にならなくて、よかつたな。もしあいつがなつてたら、間違いなくお前は 閻の力 を操る魔法使いになつてるぜ」

ディスパーは空を見上げながら呟いた。

「・・・ところどき、百年とか千年とか、いろいろすごい数言つてたけど、君ら一体何歳なの？」

それをきくと、ディスパーはふふんと鼻を鳴らして、偉そうに言った。

「五千歳」

「！」

いつの間にか、夜は明けていた。

「ねえ本当にいいかな。何も言わずに出てきちゃっても、アデルは前を行くインプに絶えず念を押した。

「だーから・・・・大丈夫だつて、さつきから言つてんだろ」「面倒くさそうにこうもりが言つ。

「でも　でもジャックキーさんたち、探してゐみたいだつたじゃないか。　やつぱりますいよ。言つておかなきや」

こうもりが苛々しながら振り向いて、心配性の相棒に顔を近づけた。
「あのはな、お前を探してボッコボッコにするために、あいつらは血眼になつて俺様たちを探してんだ。魔術師にわざわざお別れの挨拶をいいたがる変人がどこいる？　あ？　　お前はな、あの村で一つの魔法を使つちまつたんだ。それも特別強力な魔法を。魔術師とバレた以上、もうあそこにはいられない。よーく覚えとけ。それが魔術師つてもんだ。長い間同じ場所にいることはない。　できなんいんだ。仕方がないのさ。みんなそれを乗り越えてきてる。それが出来なきや、早死にするだけさ」

さすがのアデルもそこまで言われぢや、首をすくめて黙り込むしか無い。

スターが異界へ消えていつたあと、ディスパーはすぐこの村を出発し、「怪物の洞窟」へ乗り込むと宣言した。アデルはもう少しこの村に滞在したい気持ちもあり、一日だけだが、世話になつた村人にきちんと礼を言いたかつたので強く反対したが、ディスパーはそれを無視し、「怪物の洞窟」へと（勝手に）進み始めた。アデルは仕方なく付いていくが、五分ごとにディスパーに念を押し、しつこく何か言つてからでていこうと催促していたのだ。

一人の魔術師と一匹のインプは、しばらくだまつて進んだが、次第に道が険しくなり始め、山登りの経験のないアデルは、ついに音

をあげた。

「ちょ、ちょっとタイム。ディスパー、待つて」

「なんだ。もうバテたのか?」

「そんなこと言つても、僕、山を登るのは初めてなんだ」

アデルはリュックから地図と水筒を出しながら、ボソボソと言つた。

「はあ? こんなもん山じゃなくて、丘みたいなもんだぞおい」

アデルはその言葉は無視して、旅のための地図を開いた。

王宮で渡された地図は手書きらしく、とても丁寧に書かれているが、やけに古びた感じがする。

最近書かれたもののはずなのに。

アデルは小さな違和感を覚えた。

「・・・・ここが、怪物の洞窟」

アデルは地図の右はしのほうを指しながら咳いた。

「ああ。この辺が今居る位置だ・・・・ふむ、まだ結構歩くな」

ディスパーはアデルから水をもらいながら横で言つた。

「・・・・ディスパー、これは? 何か変なマークがあるんだけど」

アデルは目を細めた。

それはとても小さく、黒い染みのようであつたが、なにやら怪しげな臭いを撒き散らしていた。

「なにかな。何か、髑髏みたいだけど」

アデルは地図に顔を近づけた。

その瞬間だった。その黒い染みが突然素早く動き、アデルを物凄い力で引っ張つていこうとしたのだ。アデルは、何か考える余裕もなく、ただ本能的に引っ張る力とは反対のほうに抵抗した。ディスパーもなにやら叫んで、アデルを地図と反対方向に引っ張つた。両方に引っ張られたアデルは、最高に気分が悪い。

「バチン!」

と、ゴムがちぎれるような音と共に、アデルはディスパーのほうに仰向けに倒れこんだ。

「・・・・・」

アデルは顔を真っ赤にし、息を荒げて『ディスパー』をゆっくりと見上げ、無言の問いかけをした。

ディスパーはアデルをつかんでいた鉤爪を離し、地面に着地した。
「おいおい・・・・この地図に魔力があるだなんてお前・・・・一
言も言つてなかつたよな？」

反対に質問され、アデルは不意を打たれた。

「うん。で、でも　僕たつて、こんなのが仕組まれているなんて、
全然知らなかつた」

アデルは地図の黒い染みのような所を睨みつけた。

「なんなの、これ？」

ディスパーはふうと息をつくと話し始めた。

「こいつは、異界にしかないはずの小さな・・・・うーん人間界で
言うヒル・・・・みたいな奴だな、うん」

アデルは「ヒル」と聞いた途端、くらりと世界が反転し、気絶しそうになつた。

それもそのはず、アデルはこの世で最もヒルと名のつくものが大嫌いなのだ。

小さいころ、弟のアルと喧嘩をした日のことだつた。悪知恵の働くアルが、悪戯でアデルのベットに近くの池で捕まってきたのか、何十匹というヒルを入れたことがあつた。そしてその日の夜、アデルがベットに入った途端、ヒルがいっせいにアデルの背中に吸い付いたのだ。それはもう・・・・言葉では言い表しようのない恐ろしさだつた。

アデルはその日から、ヒルを見ただけで飛び上がり泣き叫び、大パニックを起こしてまつようになつたのだ。

「ヒ、ヒル？」

恐怖のあまり、アデルの声は震えていた。

「ああ。お前、ヒルが苦手なんだな」

ディスパーはアデルの心の中が分かつたのか、ニヤニヤしながら言

つた。

「異界では、このビルを移動手段として使っている。こいつに吸わると、指定された場所に行き着くんだ。でも、こいつは、誰かが魔力を使って行き着く場所を指定しないと、吸い付いた奴を異次元に放り出すんだ。この魔法を掛けられる奴は、相当の使い手だな。……しかしこの世界にも、魔力を持つものは結構少なくなつてきたからな……おい、この地図を描いたのは王宮に居た奴の誰かだよな？」

ディスパーは真剣な表情で問いかけた。

「うん。多分……そのはず」

アデルは確信なさそうに小さく言つた。

「……そうだとすると、王宮、もしくはこのトゥーマリアに、かなりの力を持ったお前以外の魔術師が居る可能性がある。ほほ、確実にな」

「そうか。でも、トゥーマリアにはそんな人何処にもいないとと思うけど。皆魔術師嫌いだし……怪しいといえば、国王とか、あのティーナとか言う、王女ぐらいだと想うけど」

アデルは最後に見た国王の冷ややかな微笑を思い出しながら言つた。
「ああ。あの国王と王女は魔術師の可能性が充分にある。ま、確信は無いがな。とにかく今は、先に進もう。このビルは俺が取り除いてやる。地図を開くたびにお前にパニック起こされたんじゃ、たまんないからな」

しばらくして、一人と一匹は再び歩き始めた。地図によると、この辺りからは草や大きな木は殆ど無くなり、岩石と水だけの寂しい場所に入るらしい。

アデルは、さつきの巨大トカゲと、あの憎たらしい「ビル」のことを思い浮かべた。

またおかしな怪物どもが出てこなければいいけど……
アデルはいやな予感がして、首をすくめた。

そして、そのアデルの予感は、見事に的中することになる。

アデルとディスパーが、地図どおり何もない、寂しい道を黙々と歩き始めてからしばらくして、大きな湖のほとりに出た。水は、多少濁っていたもののなんとか飲料水として飲めるようなので、ここでアデルの水筒を満たそうと、荷物を降ろした。

「ふう・・・やつと広い場所に出れだせ。村とかの狭い場所は苦手でな」

ディスパーは広い湖の上を低空飛行でゆっくりと旋回しながら、ほつとしたように息を吐き出した。

「・・・よかつたね」

アデルはその様子を微笑ましい思いで眺めながら水筒を取り出し、湖のほうに屈み込んだ。固く閉めた蓋を開け、水筒を水の中に押し込むようにして、水を流しいれる・・・。

アデルの指先が、冷たい水に触れた。

その途端、湖に一つの大きな波紋が、物凄い勢いで広がる。

それと一緒に大きな風も吹いて、辺りをざわめかせた。遠くの森で、物凄い数の鳥達が、一斉に飛び立ったような音がする。

同時にドクン、とアデルの鼓動が大きく波打った。

アデルは瞬時に何かが起ること悟り、同じように表情を引き締めたディスパーと目配せをする。アデルはあまり音が立たないよう、まだ空っぽの水筒を脇に置いた。何が出来てもすぐに対応できる体勢をとって、身構える・・・。

どのくらいたつたのだろうか。辺りは、全ての音をなくしてしまったかのように、カタリとも音をたてない。さつきまで優しくそよいでいた風も、木々の葉を揺らすのを躊躇つかのよつて、いつの間にか、消えていた。

アデルが一瞬、肩の力を抜いた。

「バツシャア！」

物凄い量の水飛沫があがり、アデルは少しの間、なにも聞こえなくなつた。ディスパーも同様のようで、混乱したように水飛沫が落ち終わるのをひたすら待つ。アデルの姿も見えていないようだ。

何がなんだか、わからない。

この状況では、何処から怪物が飛び出してきても、おかしくない。

アデルは不意に、猛烈な恐怖を感じ、ディスパーの姿を必死で探しながら、やみくもに、殆ど無意識に走り出した。途中で、何か固いものを蹴った感覚がしたが、気にならない。時折聞こえる不気味な水の音が怖さを搔き立て、アデルはいつそ足を速める。湖の周りを一周したかもしれない。此処は何もない岩場だから、何処も同じような景色に見える。もう自分が何処にいるのかさえ、解らなくなっていた。辺りを必死で見渡し、さつきの水飛沫が残した霧の中に、目を凝らす。ディスパーの姿は、今だに見当たらない。

怖い怖い怖い怖い怖い
 ！

次第に浅くなつていく呼吸。焦つてはいけないことは、なんとなく解つていた。しかし、落ち着こうとしても、怖い、という思いが、どうしても付き纏う。肺が急に苦しくなつて、アデルはやむなく足を止めた。心臓の音が、異常に耳に響く。足が小刻みに震えて、立つているのもやつとだ。

その時、しゅるりと、何かが足首を掠めた。

アデルはヒッと小さく声をあげ、また走り出しそうになる。やつとのことでの理性を取り戻し、深呼吸を繰り返してから、用心深く足首に触れてみた。触った感触では異常は見当たらないが、アデルは念のために足首に目をやつた。その途端、足首を掠めたものの正体が、明らかになつた。銀色に煌く、縄のような太い糸の固まり。どうやらその糸は、奥のほうまで続いているようだった。アデルは用心しながらその先を目で追つていいく。永遠に続くかのように、糸は奥へ奥へと続く。アデルは半ば無意識にその糸のほうへ足を踏み出して

いた。

「クスツ」

全身をくすぐるかのような、不気味な含み笑いが横を通り抜けた。アデルは、足を踏み出したままの状態で硬直し、目だけを動かして笑い声の主を探す。

不思議なことに、恐怖心は少しずつ消えていき、アデルのいつもの五感が冴えてきた。ゆっくりと体勢を立て直し、辺りを見渡す。

不意に、背後に何かの気配を感じた。

アデルは瞬時に振り返る。その途端、アデルは驚愕と感嘆で、身体が止まってしまった。

それもそのはず、銀色の糸の主は、上半身は人間、腰から下は、青色に煌く鱗で覆われていて、先のほうに尾鰭が付いている。そう人魚だったのだ。繩のような物は、人魚のとてつもなく長い、髪の毛だった。

銀髪の美しい人魚は、少し離れた岩に腰掛けて、アデルを警戒しながらも興味津々と言った様子で眺めている。

もちろん人魚なんて存在しないと信じていたアデルは、現実逃避をしてしまいそうになつたが、すぐに落ち着きを取り戻し、この世にはインプや変身人間だつているんだから、と必死で納得しようとした。その間に、人魚は徐々に警戒を解いたのか、乗つっていた大きな岩からスルスルと、まるで人間が歩くように難なく降りてきて、アデルの顔をまじまじと見つめ始めていた。アデルは至近距離で見つめられ、人魚のあまりの美しさに見惚れてしまいそうになつたが、無理矢理重い足を動かし、人魚から距離をとる。

人魚は最初、アデルの行動に驚いたようだが、すぐに悪戯っぽい笑みを浮かべ、信じられないぐらいの速さで再びアデルの目の前に来ていた。

クスクスと、人魚が笑う。アデルの驚いた顔を見て、愉快そうだ。

アデルはムツとしたが、人魚の笑い顔に見惚れて、人魚から距離をとるのを忘れてしまった。

「あなた、魔法使いね」

その容姿とはあまりにもかけ離れた、キンキンといやに耳につく声。アデルはその声で、人魚の美貌の呪縛から解かれ、急いで出来るかぎり早足で後ずさる。その間も、人魚から目を離さなかつた。

「フフ・・・そんなに警戒しないで」

人魚は今度はアデルと距離をとつたまま、楽しそうにアデルを見ながら囁く。

「あなたは、魔法使い。そうでしょう?」

人魚はほんの少し顔から笑いを消し、にこやかな表情とはづらはらに、どこか冷たい目を向けた。

「だったら、なんだ」

アデルは強気な声に聞こえるように努力しながら、人魚の目だけを見ていた。

「あなたが、湖に触れた瞬間、湖全体に波紋が広がったわ。それはあなたが魔法使い、もしくは強い魔力を持つた人物だということなの」

人魚は瞬きを繰り返し、アデルをじっと見つめた。

「・・・この湖はね、魔法使いの魔力を吸い取る力を持つてるの。その魔力を使って、大きくなっているのよ。今も、さつきのあなたから吸い取った魔力で、この湖はほんの少し成長したわ・・・フフ・・・ありがとね」

心底愉快そうに笑う人魚を見て、アデルはゾッとした。もう、人魚が美しいとは思わない。

「だからもし、この湖に落とされたり、間違つて水浴びでもしてしまつたら　あなた、おしまいね。もう魔法なんか、二度と使えなくなるわ。・・・でも今はまだ大丈夫、あなたは指先で触れただけだから、そんなに身体に変化はないはずよ・・・でも、この先は、更に魔力がなければ通ることを許されない、罠の道。湖に魔力を全て抜かれて空っぽになつたら、あなたは、絶対に進むことができない」

人魚は歌つように言つて、不気味な微笑みを浮かべながら締めくつた。アデルの反応を楽しむかのように、じつと見つめる。

人魚から聞かされた、あまりに恐ろしい湖の正体に、アデルは顔面蒼白だつた。もしもこの湖の水を、水筒に満タンに汲み入れ、それを飲んでいたら？ アデルの魔力が吸い取られ、魔法が使えなくなる。

これが、アデル一人の問題だつたら、飛び上がるほど嬉しい事だ。しかし、国王は、アデルの魔力を見込んでこの旅へ行かせた。アデルと、家族の命を守る代償に。魔力がなくなれば、アデルを生かしておく必要が無くなる。そしてアデルを旅へ行かせるための脅しの道具でしかない家族も、もちろん必要がなくなるのだ

頭の中を、恐ろしい光景が何度も駆け抜けた。

「魔力がなくなるのが嫌なの？」

すうつと、頭の中に入つてくるような、さつきとは違う甘い声。アデルはハツとして、目の前の人魚を見た。人魚はニイツと悪戯っぽく笑つたかと思うと、突然アデルの前から消えた。と同時に、湖の方で、小さく水飛沫が上がる。アデルが目をやると、人魚が肩まで水面に出し、こちらを見ていた。銀色の髪が、まるで水草のようにならを覆つて流れ、きらきらと反射する。顔にはまだ、悪戯っぽい笑みが残つていた。

「あなたは、自分から魔力がなくなるのが嫌なのね？」

人魚が水の中を優雅に泳ぎながら、もう一度、アデルの頭の中で繰り返す。

どうしようもなく甘い声だ。

「それはどうして？」

人魚は随分深いところまで行つて、アデルを振り返つた。アデルは無意識に人魚を睨むように見つめ、拳を握り締めた。

人魚はそんなアデルの様子に怯むこともなく、いざれも楽しそうに眺め、また小さく笑う。

「あなたには、守りたい人がいる」

」

そのときアデルは、湖の異変に気づいた。人魚を中心にして、水が

渦を巻き始めていたのだ。人魚は気づかれないようにしているのか、後ろ手で何かを隠すような仕草をしているのが、なんとなくわかる。アデルは深呼吸をして、人魚を警戒しながら、人魚の背後に回ろうとじりじりと足を動かし始めた。人魚は渦を作るのに夢中になっているようで、アデルへの注意が少し薄れていったようだつた。

「その人を守るために、魔力がどうしても必要なんだわ」

人魚は上の空で続ける。

「・・・・デルツ・・・・アデル！」

アデルは背後の声にビクリと肩を震わせたが、声の主がわかると、人魚に気づかれぬよう、唇をあまり動かさないようにして応答した。

「ディスパー！　・・・・・状況は、わかるよね？」

「ああ。少し前から、お前とあの人魚の話を聞いていた」

「・・・・人魚は、湖に何かしてゐみたいなんだけど、この位置からじゃ手元が見えない。君が飛んでいつて、見てくることはできる？」

アデルは後ろを見ずに、呟くように言つた。人魚は、気づいていない。

「ああ　任せろ」

ディスパーは、答えると同時に音も無く茂みから飛び出した。

「守りたいものがあると、人は弱くなるのよ。あなたもそうね？」

人魚の声が、頭に響く。ディスパーが、人魚の何メートルか上空に居るのが見えた

「僕は弱くない。あなたが言つたように、魔力を持つてる」

それを聞いた人魚は、待つてましたとばかりに大声で嘲笑つた。

ディスパーは、人魚の背後に回り、手元をじつと見つめている。アデルは人魚に気づかれぬように、茂みに背を向けたまま、ほんの少し、身をかがめた。

「魔力なら、私だって持つてるわ。きっと、あなたよりもたくさんね」

「・・・・ならどうして、あなたは湖に魔力を取られないんだ？」

アデルは言いながら、すぐ近くにあつた小石を指で引き寄せ、掘んだ。人魚の視線を伺いながら、掘んだ手をさり気なく後ろに持つていく。

こつちの準備はできた。アデルは人魚の背後を盗み見て、こうもりの姿を探した。

「それは、私がこの湖の主だから。・・・湖の主には、湖の弱点が見えるのよ。だから、湖は主の力を吸収できない」

アデルはその言葉で、ほんの少し人魚に関心を戻した。

人魚は笑みを浮かべたまま、しつかりとアデルを見ている。心臓が、びくりと波打つた。アデルは一瞬、ディスパーの存在に気づかれたかと思ったが、もう人魚の近くにディスパーはいなかつた。

「湖の主？ 湖の弱点？ 生きててもいい湖に、弱点なんでものがあるのか？」

「あるわ。力をもつた湖ならね。この湖も、遙か昔はただ自然にできた、普通の湖。それを、あの人魔が魔法をかけたことによって力をもち、意志をもつたのよ。だからこの湖は、自分の生みの親である、あの人魔を吸收することができない。あの人魔の一部を受け継いだ、この私にもね。偉大なあの人魔は、孤独だった私に湖の主という居場所を与えてくださった」

人魚は、瞳を輝かせながら、うつとりと宙を見つめ、少しの間、湖にもアデルにも注意をそらした。

その瞬間を、ディスパーは逃さなかつた。

何処にいたのか、目にも留まらぬ速さで茂みから飛び出し、人魚の喉笛に鋭い牙を立て、アデルに金色の瞳を向ける。人魚の真っ白い喉から、真っ赤な血が飛沫をあげた。しかし、地面におちると、青く変化し、灰色の煙をあげた。アデルはそれを尻目に、人魚の背後に全力で走り、狙いを定め握り締めていた小石を思いつき投げつけた。小石は人魚の、後ろに組んでいた手に当り、かすり傷を負わせた。それだけでも十分効果はあつたようだ。人魚は突然の出来事に身体がついていかず、思わず動かしていた手を止めた。すぐ

に、人魚の背後に出来つた大きな渦が、小さく萎んでいく。アデルは萎んでいく渦を見やり、ほつと顔面に笑みを浮かべながら、ディスパーを見た。途端にその顔から笑みが消える。人魚が力づくで、喰いつくディスパーを引き剥がし、怒りで恐ろしく歪んだ顔をこちらに向けるところだった。喉から血が流れ出していたが、人魚は気にする様子もない。よく見ると、さつきまで普通だった両手から水かきが生え、爪がどんどん伸びて鋭い刃物のようになっている。ノーザンビレッジの男達をハツ裂きにした爪だ

アデルは咄嗟に思った。

「おのれ、魔術師の若造が！ よくもこの私を出し抜いてくれたものだ。覚悟しろ！」

物凄い水飛沫と共に、人魚がこちらに迫ってくる。

アデルの頭の中は、真っ白になつた。なんとか体勢を立て直したディスパーが、遠くのほうで何かを必死で叫んでいた。アデルは朦朧とした頭で、その口の動きが、「逃げる！」といつているのをなんとか読みとつた。瞬間、ほぼ無意識に足が動き、間一髪のところで人魚の鋭い爪から逃れた。しかしその勢いで、大きな波がまともに全身にかかり、服が水を吸つて重くなる。アデルは上着を脱いで、地面に捨て身軽になると、死に物狂いで人魚から遠ざかつた。幸い此処は、岩石だらけで隠れるには絶好の場所だった。アデルは一番近い場所にある大きな岩陰に身を潜め、心臓を落ち着かせようと試みた。人魚はすでに次の攻撃体勢になつていて、真っ直ぐにアデルに狙いを定めている。アデルが何か考える前に、猛スピードで突っ込んできた。本能的に身体が反応し、咄嗟にアデルは、湖の方へ飛びだした

しまつた・・・！

そう思つたときには、遅すぎた。アデルは水面にしたたかと全身を打ちつけ、そのまま湖に入つてしまつたのだ。

「ハハハハハ！ 馬鹿な奴だ。自分から湖に飛び込みおつて！ 魔法が使えなくなると話したばかりなのに。フフ・・・こうなれば

もう何もできまい・・・十分に魔力が吸い込まれてから引きずり出して、たっぷりいたぶりながら殺してやる・・・ハハハハ！」アデルが沈んでいくのを、人魚は気が狂ったかのように笑いながら眺めた。

アデルはなんとか意識を保ち、必死に湖から脱出しようとがっていた。しかし、いくら手足を動かしても、水面にたどり着くことができない。焦る気持ちがアデルの身体を動かし、さらに体力を消耗させる。今のところ身体に変化はないが、もうそろそろで湖に力を吸われてしまうだろう。

早く　早く湖から出ないと　！

不思議なことに、水の中だというのに、アデルの意識は薄れながらも消える気配が全くしない。力を抜き終わるまで、死なせないということか。

水面近くで、人魚の笑い声が響く。異様なほど耳に残る、嫌な笑いだ。

徐々に身体に力が入らなくなる。

数分もすると、アデルは完全な無気力状態になり、諦めてゆらゆらと水底につくのを待つた。少なかつた酸素はとっくに溢れ出し、水面に泡を作っている。息が苦しいとも思わなかつた。家族やディスパーのことが頭に過ぎつたが、なんの感情も浮かばない。段々と、瞼が重くなつていく。

僕は、死ぬんだろうか

自分の中で、そうだ、と声がしたように思えた。

横目でちらりと辺りをみると、そろそろ底に着く頃のようだ。同時に、身体の奥底の方にあつた力が抜けしていくような気がし始めた。湖が、アデルの魔力を吸収しようとしている。ゴクリ、ゴクリと、湖が魔力を飲み込む音が聴こえた。幻聴だとわかつても、おぞましいと感じる。

アデルの心臓が、トクン、と波打つた。しばらくして、耳も聞こえなくなつていく。さつきまで響いていた人魚の笑い声も、遙か遠

くで吹く風のようだ。アーテルは、自分はもうすぐ死ぬのだと、確信を得た。

案外、苦しまずには死ねそうだ。そんな呑気な気持ちが、身体全体に広がっていく。

もつにも感じない 心臓のリズムが、徐々に遅くなつていく。

そして、最期にひときわ大きく波打つと、動かなくなつた

第6話 前編

此處は何処だろう？

辺りは真つ青で、他にはなにも見えない。

僕の名前はなんだっけ？ どうしてこんなところにいるんだろう？ 誰かいなの？

解らないことだらけで、頭が痛くなってきたぞ
ふと、視界がよくなってきた。真つ青だった景色が揺らいで、他のものもはっきりと見える。微かに揺れる水草、大きな岩をびっしりと覆う苔、緑色の小さな魚が、群れになつて泳ぐ。それを見て、水中にいるのだとわかつた。不思議と、陸上にいるときと同じように呼吸ができる。

もう少したつと、白い砂が一面に広がっているのも見えてきた。
所々に、幾つもの光りが差し込んで、キラキラと反射する。眩しい。
思わず目の上に手をかざした。そのとき初めて、自分の腕を見た。
白い。死人のように白い腕だった。とても華奢な細い腕。それに赤ん坊の腕のように、短い。

見ているのが辛くなつて、腕を下ろした。

そのとき、自分の数メートル先に、人が倒れているのが視界に入つた。

確かに人だつた。岩と岩の間で、ぐつたりと横たわつている。
思つてもいられない出来事に、目を見張つた。

あれは誰だらう？ もしかしたら、僕と同じように、此處で迷子になつたのかもしれない。胸が高鳴る。仲間を見つけたような、わくわくした気持ちが、心を駆け抜けた。それと同時に身体がふわふわして、浮くような感覚がはじめた。景色が動く。
気がついたら、その人のすぐ近くに来ていた。

金色の髪の、男の子だった。

しばらくの間、その少年に魅入つてしまつた。端整な顔立ち。目

鼻立ちがくつきりしていて、人形みたいだ。長いまつげが揺れる。

女の子のようだけど、きっと男の子だ。

確信に似た気持ちだった。

金髪が陽光に反射して、宝石のように光り輝く。背中に真っ白な羽根が生えていてもおかしくないぐらい、綺麗な少年だった。サラサラの髪と服が、競うように互いに揺れる。

その瞼の奥の瞳を見てみたいと思つたが、あいにく目はしっかりと閉じていた。

そういうえば、顔も青白い。薄い唇がほんの少し開いて、まるで空気を吸おうとしているかのようだ。どこかが違う死んでいるのかもしれない。

そう思つた途端、この少年を助けなければ、と半ば使命のようなものを感じた。

自分の短い、赤ん坊のような両手を伸ばし、男の子の背中に差し込んだ。ちょっと力を入れただけで、すぐに身体が浮く。

見た目より、体重が軽いのかもしれない。

そんなことを思いながら、無意識に地面を力強く蹴り、水面に向かつて泳ぎだした。陸は、かなり高いところのようと思えたけど、段々とスピードがでて、すぐに水面に着いてしまった。

近くに岸を見つけて、そこに少年の身体を横たわらせた。自分も水から出て、陸に上がる。

その途端、身体の感覚が、急にはつきりしてきた。

首の上が重い。きっと頭が乗ってるんだ。腕もある。指もしつかり動くみたいだ。

足の感覚もしてきた。しっかりと、地面を踏みしめている。

湿った土の柔らかい感触も、皮膚を伝つて感じ取れた。感激で、少しの間ぼつとつとしまつた。無意識に、自分の足に目を移す。そして、またしても自分の醜い身体に肩を落とすことになった。足は、真っ黒だった。まるで焦げてしまつたようこ、黒い。そして、枝きれのように細いのだ。

溜め息をついて、自分の足から視線をそらした。

とりあえず、歩ける。それでいいか。

辺りは、見たこともない景色だつたけど、少年の身体のほうが気がかりだつた。すぐに心臓のあるところに耳をあて、動いているか確かめる。心臓は、止まっていた。

しかし諦めきれず、他のところの脈も計つてみる。はたしてどの脈も、動いていなかつた。体温も、ものすごく低い。それどころか、どんどん冷たくなつている。

「のままじや、ダメだ！」

そう思つたとき、自分の両手が明るく光りだしているのに気づいた。驚いたけど、ほのかに温かい、優しい光になんとなく安心する。手を広げてみると、光りが強まって、辺り一面を照らし出した。何も考えずに、少年の身体に光り輝く両手を置く。それだけでは足りない気がして、少年を引き寄せ、短い腕を精一杯伸ばして、包み込んだ。少年の身体が温まつていく気がする。小さな希みをたくして、長い間、両手で少年を温め続けた。

「お前……誰だ？　そこで何してる？」

どれくらいたつたのだろうか、背後で声がした。

陸に上がつたときから、なんとなく気配を感じていたので、あまり驚かない。ゆっくりと、振り返つた。小さなこゝもりが、茂みから顔を出し、こちらの様子を伺つていた。大きな金色の瞳が目立つ。こうもりが喋つたことには驚いたが、相手も自分の姿に驚いているようだ。とりあえず何か喋るつと口を開け、パクパクと動かしてみた。微かに音がする。

「・・・お、お前こそ、誰だ？」

素直に言葉が出てくる。

声は、思ったより澄んでいて、きれいだつた。例えるなら、まだ声変わりのしていない、幼い男の子の可愛らしい声。自分が喋つたことに、相手が更に驚いているのが解つた。

しばらくの沈黙。

なにも喋らず、静かに互いを見つめる。こうもりを見ながらも、少年を抱く腕の力は弱めなかつた。こうもりが、数歩前に出てくる。本当に小さい。

「……そこにはいるのは誰だ？」

少年に気づいたようだ。

腕のなかでぐつたりと横たわる少年を、じつと見つめている。その視線につられて、少年のほうに目を移した。その途端、驚愕で目を見張った。

なんと少年の頬に赤みが差して、ほんのりと淡いピンク色に染まつていて。それに、呼吸の音も微かに聞こえるのだ。慌てて脈を計つてみる。心臓は、正常に動き出していた。

「生きているのか？」

こうもりがすぐ近くまで来ていた。声が、僅かに震えている。こうもりが自分を見たので、しっかりと頷いてやつた。こうもりは信じられないというかのように言葉を失い、ただ息を吹き返した少年を見つめるばかりだつた。

本当に、生き返つてゐる。

自分でも信じられなかつた。恐らく少年を救つたのであらう自分の両手は、まだ強い光を放ち続けていたが、そつと、少年の身体から離してみた。少年がまた死んでしまうのではないかと恐怖が駆け抜けたが、少年は依然しつかりと呼吸を続け、体温も戻りつつあつた。

「……あなたが、アデルを助けたのか？」

唐突に、こうもりが問う。戸惑つたが、静かに頷いた。こうもりが、今はもう小さくなり始めた光る両手を見つめる。

「その両手か……？」

頷く自分を見て、こうもりがふつと頬を緩める。きつと笑つたのだ。

「……そうか。それじゃああんたは、アデルの恩人だ」

「……おん・じん」

「やうだ。命の恩人だ」

「こうもりが、小さな子を諭すように優しく言つ。ムツとするはずなのに、不思議と腹が立たない。

「でも、どうしてこの子が助かったのか……知らない」「こうもりは、しばらへちらをじつと見つめたが、ふと息を吐き出して、口を開いた、

「俺様だってそんなもん、知らないさ。……とりあえず、此処は湖の近くで危険だ。もつと茂みの奥に入ろう」

どうして湖の近くが危険なのか解らなかつたが、こうもりの真剣な瞳をみて、頷いた。

「こうもりはひらけた場所を見つけると、こちらを向いて、此処にしようと言つた。頷いて、腕に抱いていた少年の身体を地面にそつと下ろす。少年の意識はまだ戻らなかつたが、しつかりと呼吸していることがわかつて、ほつとした。すぐに腰をあげて薪を拾いにいこうとしたが、どうやつたのか、いつのまにかこうもりの目の前に明るいオレンジ色の炎が暖かく燃えていた。

「薪は、拾いにいかなくてもいいぞ」

きよとんして炎を見つめているのを見て、こうもりが言つた。

「……お前は、魔法使いなのか？……なにもないとこから、炎をだした」

こうもりが、ゆっくりと振り返る。

「……魔法使いではないが、魔法は多少使える。どうしてなんかは、今説明すると長くなるから、また後だ。あと、俺様をお前などという汚らわしい言葉で呼ぶな。虫唾が走る。ディスパーだ」

「……ディスパー」

「ああ。ディスパー様でもいいぞ」

「こうもりが真剣な顔で言つた。何かを期待するかのようこそ、返事を待つ。」

「・・・僕は、ディスパーと呼ぶ」

途端にこうもりはつまらなそうな顔でふくれ、そっぽを向いた。

「あつそ。ふん！ いいさ。いつだってそうだ。俺様はいつも、どんな下等生物にも呼び捨てにされてきたんだ。まさかお前みたいな、何処の誰かわかんない野郎にでさえも呼び捨てにされるとはな。とんだ侮辱だ」

こうもりの態度には驚いたが、なんだか親しみを感じて心の中で、クスリと笑った。

「だけど・・・・・僕、下等生物じゃない」

ぼそりといふ。ディスパーは、驚いた顔でこちらをじっと見つめる。

「・・・・お前、人間か？」

「・・・・・わからぬ」

途方にくれて言つ。声が震えていた。

「お前は、今までどこに居た？」

「わからない。でも、湖のなかで意識を取り戻した」

「湖？ どういうことだ。水中で息が出来るのか？」

頷く。確かに、湖の中でも苦しくなかつたのだ。同時に背中に悪寒が走る。

今になつて、自分が誰かわからないことに恐怖を感じた。このいうもりなら助けてくれる気がして、たうように金色の瞳を見つめる。「自分はどこの誰で、どういう生き物なのか、性別さえもわからぬいのか？」

「わからない。でも・・・自分は男だと思つ」

「・・・・・何故だ？」

わからない。本当に曖昧な気持ちだったが、男だと、自信をもつていえる自分がいたのだ。それを、こうもりに告げる。

「・・・ふむ・・・じゃあ、ちょっと立ち上がりて」

言われた通りに、立つてみる。少しよろけたが、さつき歩けたのだから、大丈夫。すぐにバランスをとつて真つ直ぐに立つことがで

きた。

ディスパーは小さな羽で舞い上がり、頭のてっぺんから足の先まで観察した。

「……お前、自分の姿みたことあるか？」

一通り身体を観察し終わり、少し考えた後、ディスパーは唐突に問うた。

静かに首を横に振る。

湖の中で腕をみ、陸で足を見ただけで他の部分は見たことがない。むしろ、見たくなかつた。腕といい、足といい、まるで継ぎ接ぎだらけの古びた人形のようで、見ていて辛い。

「じゃあ、見てみたほうがいい。それでどう感じるかしだいで、わかるかもしれない」

その言葉に反応して、思わずディスパーに詰め寄つた。

「本当か？ 本当に僕が誰だかわかるの？」

「全てが解るわけじゃない。ほんの少し、お前の情報が手に入るかもというだけだ」

「それでもいい。なんとかなるなら」

「……よし。湖は危険だから、俺様が直々に鏡を出しある。ありがたく思つんだな。じゃ、ちょっとついてこい」

偉そうに言うディスパー。少年 アデルの様子をちらりとみて、まだ意識が戻らないことを確認すると、ディスパーについて茂みの少し奥のほうに行つた。少年には、自分の醜いであろう姿を見せたくなかつたのだ。

茂みの中は、意外と通りづらく、枝や棘に引っ掛かつては舌打ちをして枝切れのような指で不器用に外していく。そんなこんなで、ディスパーがいるところまで行くのに、随分時間が掛かつてしまつた。やつとディスパーを発見した頃には、とつこの間にまたも何処からか鏡を取り出し、待ちくたびれたというように鏡の縁に頬杖をしていた。

「おっせえぞ。さつさと鏡の前に立て」

いわれたとおり鏡の前に立つ。しかし覚悟が決まらず、目をつぶってしまった。一度後ろに下がり、再度鏡の前に立つてみる。しかし、やはり目をつぶってしまった。自分が本当に醜い姿だろうという直感が確かにあり、それが恐怖へ繋がっていたことに今更になつて気づく。何度もそれを繰り返しているうちにディスパーも痺れを切らしたのか、大きく避けたくちを開いた。

「おい何してんだ。意味ないだろ」

わかってる。そんなのこと、自分が一番解つてる。自分のやつていることが、時間の無駄でしかないことは。ただ鏡を見るというだけで、こんなにも取り乱す自分が不思議で、歯がゆくて堪らない。不意に、涙が出そうになつた。

「大丈夫だから、ちゃんと自分に向き合え」

厳しくも、優しくも聽こえる言葉だった。ディスパーがどこか優しげでそれでいて何を考えているのかわからない、不思議な眼差しで見つめていた。その言葉が、眼差しが、快いと感じる。瞼を開け、しっかりと自分を見つめた。

まず、服を着ていた。当たり前のことのようだけど、服を着ている感覺が全くなかつたのだ。それが皮膚かのように、自分の身体にとても馴染んでいた。服には、大きなフードがついていて、顔と頭を隠している。震える手で、ゆっくりとフードを外してみた。顔をみるのは後にして、頭を見てみる。頭には、ちゃんと髪の毛が生えていた。赤茶色の柔らかい髪の毛。首の辺りで、短く切つてあつた。髪の毛が普通だったことにはっとしながら、まだ顔を見る勇気が出ず、胴体を眺めた。身長は、大体十二～三歳の子供で、体型は標準。しかしあり腕と足は不格好で正反対だった。後ろを向いてみて、首の右下に何かが描いてあるのが見えたが、見るのが怖くて、気づかない振りをする。背中には特におかしな部分は見受けられなかつたが、顔を見る覚悟が出来ず、しばらくグズグズと背中を眺めていた。そんな様子を、ディスパーは一言も言葉を発さずに静かに見守つている。

しばりくして前に向を直ると、息を深く吸い込み、正面から自分の顔を見た

喉の奥のほうで、ヒュックとおかしな音がする。自分が息を飲み込んだ音だと、後から気づいた。

それは、見るもおぞましい姿だった。

右半分は、人間の顔だった。黒い瞳が、きらきらと光を放つている。鼻の頭にはそばかすが散らばっているし、血色のいいピンク色の唇も普通だった。男とも女とも見れたが、とにかく普通の子供の顔だったのだ。しかし 左半分は、言葉に出来ないほどぐちゃぐちゃに崩れていた。もはや、人間の顔かも妖しい。まず、皮膚がかつた。右の顔の皮膚がほんのりとピンク色で健康的なのと対照的に赤黒い肉の筋一本一本が、不気味なほど鮮明に見える。白い骨もところどころ見えていて、痛々しい。そして、口に歯はなかつた。あるいは、左右の上下に、鋭い牙が一本ずつ。黄色っぽく変色した牙には、その先端で皮膚を、肉を食いちぎった痕跡が、茶色い無数の染みになつて生々しく表れていた。目は狼のように鋭く濁つて、今にも泣き出しそうかのように、潤んでいる。

気づいたら身体中が震えて、地面に膝をついていた。身体が宙に浮いてしまうような、フワフワした気分だ。まだ、この姿を現実に思えない。こんなに恐ろしい光景を、生まれて初めて見た気がした。ディスパーが同じ目線のところまで降りてきて、瞳を覗き込む。瞬きした途端、鏡が目の前から消えた。

「……どうだ？ なにか感じなかつたか」

荒い息のまま、ディスパーを見て、僅かに首を横に振る。今は、それが精一杯だった。

そうか、と呟くと、ディスパーは目を逸らし、天を仰いだ。

「戾ろう。：悪いな。お前にはショックが大きすぎたようだ」

ディスパーが背を向けたまま、本当に申し訳なさそうにいう。丈夫だよと言いたかったのに、言葉が出ない。声がなくなってしまったようだ。息を吸つてみて、口の中が乾いていたことに気づいた。もう一度息を吸い込んで、立ち上がる。フードを深く被りなおしてから、ディスパーの後を追つた。

アデルのいる場所に戻るとまだ温かい炎が燃えていて、ほんの少し、気持ちが落ち着いた。ディスパーが座るよう促したので、アドルからできるだけ遠ざかつて地面に腰をつける。ディスパーはアドルの近くまでいって顔を見つめ、心臓の音を確かめてから正面に座った。

「…アデルは、いつ目を覚ますと思う?」

しばらくして、口を開いた。ディスパーはぼんやりしていたのか、ビクリと小さく身を震わせ、アドルをちらりと見た。

「…いつ目を覚ましても、おかしくない。身体は正常なんだ。しかし魔法のかかった湖にしばらく浸かってしまった。魔力が消えているかもしれないし、体质も変化してるかもしれない」

ディスパーが深刻そうに言った。

「アデルは、魔力をもつているの?」

「…ああ。そういうえば、お前はまだいろいろと知らないことがあったな」

「教えて。知りたい」

ディスパーは困惑したように視線を泳がせ、困ったように見つめた。

「俺様もできることなら教えてやりたいが、お前の正体がわからない以上、個人情報はふせておくべきだと思うんだ。お前の今までの記憶が消えているのは解る。そして、多分一度は死んでいる身體だということも。でも念には念を」

驚愕で、口がだらしなく開く。ディスパーをまじまじと見つめ、嘘をついているわけではないことを確かめた。

「本当か? 僕は、一度死んでしまったの?」

「多分な。お前の身体を見たかぎりでは。あんな状態で、現在まで生きていられたはずがない。どういうわけでお前が生き返って、この場に姿を現したのか知らんが。お前が一度はこの世から姿を消した者だといふことはほぼ確信に近い。ああ、もとは人間だろ?」

「…そう

なんだか力が抜けてしまった。心が軽くなつたような氣もするし、残念なことのような氣もする。自分がわからなかつた。

「とりあえず、お前は行く場所がない」

ディスパーが唐突に言つた。

「この場所で生きていける保障もない。なにを食べるのかわからないし、もしかしたら何も食べなくてもいいかもしないが……そう言つた事がわからない以上、お前はこの場所から身動きがとれないわけだ。そうだな？」

頷く。確かにディスパーが居なければ、自分は一人でここに立ち尽くし、またも死んでいたのかもしれない。

「つてことで、少しでも知識のある俺様がいないと、お前はダメなわけだ。だから、特別にお前の情報が手に入るまで、俺様と一緒にいることを許可しようと思う」

無意識に頷いた。嬉しいことなのだろうが、感情がうかんでこない。

「どうだ？」

ディスパーが顔を覗き込む。思わず顔を背けてしまったようになつたが、ふと気づいた。ディスパーは自分の醜い顔を見ても、表情一変えない。普通の人間を見るかのように、自然に見てくれるのだ。その視線が心地よいことに、今頃気づく。

「嬉しい。とてもありがたいことだ」

できるだけ感情をこめていつたつもりだったが、なんとなく棒読みのようになつてしまつた。さつきより、感情の出し方が不器用になつている気がする。ディスパーはしかめつ面をすると思ったが、案外優しげに頷いてくれた。何か言おうと、口を開く。

ディスパーの動きが止まつた。目を見開いて、一点をじっと見つめている。

「アデル！」

ディスパーが叫んだ。弾かれたようにアデルを振り返る。

一見さつきと何も変わっていなかつたが、ほつそりとした腕が微

かに動いている気がした。いや、本当に動いている。伸びきった指がピクリと動き、地面の土を引っかく。一度は力が抜けてしまったが、もう一度動き、今度はしっかりと土を、緑色の草を掘んだ。目を見開いて、じつとアデルを見つめていた。ピクリとも身体を動かさない。いや、動けなかつた。一度死んだ人間が、動いている。信じられなかつた。

「……アデル」

漏れ出たような、ディスパーの声。憑かれたように、アデルを見つめる

瞼が、ゆっくりと開く。その吸い込まれそうな青い瞳は、穏やかな波のように優しく広がり、辺りを見回すと、自分に向かられた。途端、意識が朦朧とする。青い瞳を中心にして、世界がグルグルと回る。吐き気を覚えた。そして、次の瞬間には真っ暗だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9587f/>

空へ present from satan

2010年10月11日18時08分発行